

亜細亜大学

# 学術文化紀要

ISSN 2436-9411 (オンライン)

第47号(2026)

---

ミシシッピ州の黒人投票権剥奪 ..... 杉 測 忠 基 1  
— カラーブラインド・レイジズムの視角から —

Shakespeare and Emotions: Pity and Empathy ..... Akiko Ikeda 25

閉ざされた聖域をめぐる「天皇」言説 ..... 馬 場 浩 平 45  
— ケンペル『日本誌』(1777-1779)と  
フレイザー『金枝篇』(1894)を比較する —

[研究ノート]

匿名電子掲示板活用によるライティング力の変化と  
多重知能との関係 ..... 阿 久 津 仁 史 61

日付を表す数詞に付される定冠詞の有無について ..... 土 屋 亮 79

---

総合学術文化学会

2026年3月刊行 PDF 版

亜細亜大学

# 学術文化紀要

第 47 号

2026 年

総合学術文化学会



# ミシシッピ州の黒人投票権剥奪

— カラーブラインド・レイシズムの視角から —

杉 渕 忠 基

## The Disenfranchisement of Black Voters in Mississippi: A Perspective from Color-Blind Racism

Tadaki Sugibuchi

### Abstract

After the open and violent election intimidation of 1875, political coercion in Mississippi temporarily subsided following the change of government in 1876. It was soon replaced by administrative manipulation as the primary means of electoral fraud. In the Congressional election between Democrat James R. Chalmers and Republican John R. Lynch, Lynch's votes were unjustly reduced, leading to a House investigation that confirmed Democratic fraud and restored Lynch's seat. In another case, factional conflicts within the Democratic Party—such as that between Chalmers and Manning—provoked similar irregularities; the committee exposed fraud on Manning's side and awarded the seat to Chalmers. In both cases, election officers themselves directly altered the vote counts.

Moreover, through gerrymandering—combining predominantly Black counties with white-majority ones—Black votes supporting Republican candidates were dispersed, preventing Lynch's reelection. Although such administrative tactics did not immediately eliminate Black political participation, they revealed the limits of biracial politics and paved the way for institutionalized disenfranchisement. The 1890 Mississippi constitution codified the exclusion of Black voters while avoiding explicit racial language that might violate the Fifteenth Amendment.

At the same time, Supreme Court rulings in *The Slaughterhouse Cases*,

*United States v. Reese*, and *United States v. Cruikshank* narrowed the reach of the Fourteenth and Fifteenth Amendments by strengthening states' rights and limiting federal intervention. These decisions reduced the amendments' effectiveness to a principle of "formal equality." From a critical race perspective, such "color-blind" legal reasoning rendered race invisible within law, positioning African Americans simultaneously inside and outside the protection of the legal order.

## はじめに

黒人の投票権をめぐる問題は、1965年の投票権法によって解決されたかに見えた。投票権法によって連邦権限が強化されたため、州や地域が人種差別的な選挙制度を維持・変更することは困難となり、その結果、黒人を含むマイノリティの有権者登録が増加したばかりでなく、連邦・州レベルでのマイノリティ議員の増加、公職者就任者数の拡大といった実質的な成果をもたらした。しかし2013年の連邦最高裁の *Shelby County v. Holder* 判決は、施行から半世紀近く続いた投票権法の規定が現実にそぐわなくなったとし、連邦機関による州の選挙制度への事前承認制度を違憲と判断した。それ以降、各州で新たな選挙規制が導入され、その多くは「人種に中立的」と称されつつ、実際にはマイノリティ有権者に不利に作用している。

1970年代末に登場した批判的人種理論 (Critical Race Theory, CRT) は、法におけるカラーブラインドな解釈や形式的平等の欺瞞性を批判し、「法の中立性」という法意識が人種差別を覆い隠し、既存の社会的権力を正当化する機能を果たしてきたことを明らかにした。その後、社会学者 Eduardo Bonilla-Silva が2003年に初版を刊行した *Racism without Racists: Color-Blind Racism and the Persistence of Racial Inequality in America* は、「カラーブラインド・レイシズム」という概念を理論的に定着させ、2022年までに第6版を重ねている。同書において彼は、カラーブラインド・レイシズムがポスト公民権運動期のアメリカにおいて、不可視的な形で制度的差別を支えるイデオロギー的防御壁として機能していると論じた。教

育の分野では、2023年の *Students for Fair Admissions v. Harvard/UNC* 判決において最高裁はアファーマティブ・アクションを違憲とし、憲法上の要請として「人種を考慮しないこと」を憲法上の原則として強調している。

こうした現代的課題を理解するためには、その制度的起点を19世紀末に遡って検討する必要がある。いわゆるカラーブラインド・レイシズムに通じる選挙制度は、19世紀に多様な技法として萌芽を示していたが、とりわけミシシッピ州憲法（1890年）は黒人投票権剥奪を制度として確立し、南部諸州に先駆けて固定化した。さらに1898年の *Williams v. Mississippi* 判決に至る過程は、黒人有権者の政治的影響力を、制度設計を通じて抑制し、後世のカラーブラインド・レイシズムを制度的に先取りする前例を形成したのである。

黒人投票権剥奪についての研究は William A. Mabry が1933年にデューク大学に提出した「南部黒人の投票権剥奪（The Disfranchisement of the Negro in the South）」という博士論文で始まった。<sup>1)</sup>その後、J. Morgan Kousser,<sup>2)</sup> Steven F. Lawson,<sup>3)</sup> Alexander Keyssar,<sup>4)</sup> Michael Perman<sup>5)</sup>らが、それぞれ特徴のある研究書を刊行した。近年では、ジャーナリストの視点から現代アメリカの投票権を巡る闘争を描いたアリ・バーマンの著作も翻訳されている。<sup>6)</sup>投票権は現実の政治と直結するため、社会的関心が高く、豊かな研究蓄積がある。

カラーブラインド・レイシズムの視座からの分析は Kousser によって現代的文脈で試みられているものの、<sup>7)</sup>19世紀から20世紀初頭の南部における投票権剥奪を同視座から検討した研究は十分とは言えない。当時の司法は、「形式的平等」すなわち法文上の中立性をもって平等の証とみなす立場を採用し、この理念がやがて現代のカラーブラインド・レイシズムへと受け継がれていく。本稿は、この形式的平等という法理的カラーブラインドの形成と展開を、19世紀末ミシシッピ州における黒人投票権剥奪の過程を通じて検討するものである。

第1節でミシシッピ州における黒人投票権剥奪の政治過程を検討する。対象とするのは、1875年の選挙運動によって共和党政権が暴力を背景に崩壊した時期から、1890年の州憲法制定を経て、1898年に連邦最高裁が同憲法を合憲と判断した *Williams v. Mississippi* 事件に至るまでの過程である。第2節では、最高裁が *Slaughterhouse Cases* (1873)、*United States v. Cruikshank* (1876)、*United States v. Reese* (1876)、の各判決で示した法理を分析し、表向きの中立性を強調することによって、再建期初期に連邦議会が築こうとした人種平等の理念的基礎がいかに掘り崩されていったかを明らかにする。第3節では、結果として、法の運用にまで踏み込んだ *Yick Wo v. Hopkins* (1886) から後退した *Williams v. Mississippi* (1898) を分析する。第2節で検討した三つの判決は、連邦主義に基づく州権優越の法理 (*Slaughterhouse Cases*)、私人による暴力を容認する法理 (*Cruikshank*)、そして萌芽的に形式的平等という異なる法理 (*Reese*) を通じて、形式的平等の法理を確立した *Williams v. Mississippi* と連動し、黒人を法の内側に含みつつ法の外へと排除する構造を法制度として定着させ、修正第14条および第15条の実効性を次第に失わせていった。この節では、その過程を検証するとともに、批判的人種理論 (CRT) の視座から、これらの法理が差別を不可視化し、構造的に強化する機能を果たしたことを論じる。

## 1. 制度化への政治プロセス

ミシシッピ州では1875年に、いわゆる「ミシシッピ・プラン」と呼ばれる共和党政権転覆計画が実行に移された。この計画において民主党は、暴力的な選挙運動によって共和党を政権の座から追放しようとした。その一例として、連邦職員である副収税官ウィリアム・B・レッドモンドは、投票日のほぼ1か月前に、エミート郡の緊迫した状況を上司に報告している。「彼らは、頻繁に武装してデモ行進を行い、暴力をほのめかして威嚇し、通りや公共の場で大規模に粗野かつ無法な行為を繰り返すことによって、

文民当局を威圧した。その結果、共和党の公職者や名望ある市民が、この共同体で暗殺の重大な危険にさらされずに生活することは、疑う余地なく不可能であることを示した<sup>8)</sup>」。この証言は、ミシシッピ・プランがいかに暴力と威嚇を通じて政治秩序を再編しようとしたかを明瞭に示している。

こうした暴力によって共和党の支持基盤は大きく動揺し、翌 1876 年には知事エイムズをめぐる弾劾問題へと発展した。エイムズは弾劾を回避するために辞任したが、後任となるべき副知事はすでに弾劾・解職されていたため州憲法の規定に従い、州上院の臨時議長であった民主党員ジョン・M・ストーンが同年 3 月、州知事に就任した<sup>9)</sup>。これによりミシシッピ州において共和党政権は崩壊し、民主党政権が成立したのである。

1890 年の憲法会議で代議員ジェームズ・J・クリスマン判事は、投票制限の導入を主張するために、1875 年以降の選挙のあり方を批判した。

ミシシッピ州では 1875 年以降、全有権者による投票も、公正な開票も行われず、白人の支配を非常手段によって維持してきたことは、公然の秘密である。率直に言えば、票を不正に水増しし、偽証を重ね、州の各地で不正と暴力によって選挙を奪い取ってきた。世論の良心は反発し、(中略)各地の思慮ある人々は、このような方策の行き着く先には、必ず災厄が待ち受けていることを予見していた。(中略)道徳的にまともな人間であれば、1875 年以来ミシシッピ州で続けられてきた選挙方法を温存することに賛成するはずがないし、真の政治家<sup>10)</sup>であれば、政府が暴力と不正によって維持されると信じることはない。

民主党が政権を奪還した 1876 年の選挙と 1880 年の選挙とでは違法な選挙活動の手法に変化が見られた。ミシシッピ州第 6 選挙区で黒人共和党員ジョン・R・リンチと白人民主党員ジェームズ・R・チャーマーズが 1876 年に議席を争った。リンチは 1873 年から 1877 年まで下院議員を務めたが、民主党が暴力的手段を伴う選挙運動を展開した 1876 年の選挙で、チャー

マーズに敗れた。

この1876年の不正選挙をめぐって、連邦議会上院が調査委員会を設置し、公聴会を開催した。証人として出席したリンチは、第6選挙区に属する11郡のうち、とくにクレイボーン郡とジェファソン郡を「恐怖政治」の状態であったと証言している。クレイボーン郡ポート・ギブソンでは、共和党員の演説を禁止する取り決めがなされ、町には武装した民主党員が多数滞在していたため、リンチは予定していた演説を中止せざるを得なかった。その結果、数百人の黒人有権者たちが演説を聞く機会を失った。連邦軍中隊長と民主党指導層との間で武装禁止の合意があったにもかかわらず、一般議員はこれを無視し、馬上でこん棒や棒のむちを誇示していたという。

ジェファソン郡のロドニーとファイアットでは、リンチが演説を行う予定だった時間と場所で民主党の集会が意図的に重ねられた。これらの集会では、民主党員が銃を携行していたが、暴力行為には至らず、行進などの威嚇行為にとどまった。民主党の目的は、ジェファソン郡で崩壊しつつあった共和党組織が、リンチの演説による勢力回復を阻止することにあった。黒人が多数を占める両郡では、恐怖が広がり、多くの黒人が有権者登録を<sup>11)</sup>していても、実際には投票を行わなかった。結果として、民主党候補のチャーマーズが第6区から選出されるに至ったのである。民主党員が所持していた銃が実際に使用されることはなかったが、暴力の潜在的脅威は選挙過程の背後に存在し続けた。この「暴力の影」は、後の選挙で制度的手段による不正へと形を変えていくことになる。

チャーマーズは1878年に再選されたが、1880年の選挙ではリンチが再び彼に挑戦した。結果はリンチの敗北であったが、彼は選挙結果に異議を申し立てた。この異議申し立てが連邦議会下院で認められることになる。当初、訴訟はミシシッピ州裁判所で審理されたが、憲法上、連邦議会下院が裁判権を有するため審理は下院に移された。<sup>12)</sup>

1880年11月22日付けのリンチによる異議申立通知の写しには、1876年選挙とは異なる不正が列挙されていた。リンチが1876年選挙で訴えた

のは威嚇的な選挙運動であったが、1880年の異議は、投票所監督官や選挙管理委員の不正操作—すなわち開票や集計の段階での違法行為—に焦点が当てられていた。リンチの異議申立通知と下院選挙調査委員会報告書（以下、下院報告書）によれば、チャーマーズ陣営による主な手口は以下の通りである。

ジェファソン郡では、投票用紙や集計表の入った投票箱が郡都への輸送途中で奪われ、リンチ票が145票失われた。クレイボーン郡では、連邦係官の立ち合いが拒まれている間にリンチ票が抜き取られ、その分だけチャーマーズ票が水増しされた。アダムズ郡では、係官が投票者に不要な質問を繰り返して時間を浪費させ、投票時間を奪うことで、多数の有権者が締切り時刻までに投票できなかった。同郡の別の投票所では、大量のリンチ票が取り出され、同数のチャーマーズ票に差し替えられた。ウォーレン郡では郡の選挙管理委員が約2,000票のリンチ票を集計に加えなかった。さらにワシントン郡では、共和党側の選挙監督官の目が届かない所に投票箱が移され、票の入れ替えが行われた。<sup>13)</sup>

1882年4月29日、下院は最終決定を下した。選挙委員会の多数派報告（11名署名）はリンチの当選を認め、少数派報告（3名署名）はチャーマーズの当選を主張した。討論ののち、少数派報告は賛成104票、反対125票、棄権62票で否決され、多数派報告は、賛成124票、反対84票、棄権82票で可決された。こうしてリンチの当選が正式に承認され、彼は議場で宣誓を行い、下院議員として復帰した。<sup>14)</sup>

この審議の過程で、下院選挙委員会委員長ウィリアム・H・コーキンズ（共和党）は、ミシシッピ州の選挙実態を説明する中で、『ピックスバーグ・ヘラルド』紙編集者チャールズ・E・ライト（民主党）の証言を引用した。ライトは、同州選出上院議員L・Q・C・ラマーの政治路線、一暴力と不正を排除する立場—を支持し、チャーマーズの過激な手法を批判していた。<sup>15)</sup>彼の発言は、州民主党内部の対立を示すものでもあった。実際、チャーマーズは議席喪失後、民主党から離脱し、共和党との連携を模索するように

なる。

1882年の選挙でチャーマーズが提唱した選挙区改変（ゲリマンダー）は、第6選挙区に集中していた黒人票を分散させることを狙ったものであった。第6区はミシシッピ川沿いに南北に細長く延びた靴紐区（Shoestring District）として知られ、黒人有権者の比率が高かった<sup>16)</sup>。チャーマーズはこの区を分断し、白人多数郡に組み入れることで、各選挙区における黒人票の影響力を弱めようとした。その一部は実際に採用され、第6区は南端のアダムズ郡とウィルキンソン郡を残し、東方に9郡が追加された<sup>17)</sup>（地図1参照）。その結果、第6区は、黒人票田として性格を失い、リンチは1882年の選挙で民主党候補に敗れたのである。

このときチャーマーズ自身は、第2選挙区から独立民主党として出馬し、ラマー陣営の民主党候補バン・マニングと争ったが、敗北した。ところが選挙結果を不服としてマニングを州裁判所に提訴し、州最高裁を経て、最終的に下院がチャーマーズの異議を認めるという逆転の経過をたどった<sup>18)</sup>。

最も明白な不正がテート郡で発生した。1882年11月7日の選挙で、実在しない候補J・R・チャンプレス（J. R. Chambless）に1,472票が投じられたとされ、チャーマーズ（J. R. Chalmers）には票が一票も入っていないと集計された。しかし同年11月24日、テート郡選挙管理委員事務員ジョン・C・クリフトンが証言し、1,472票はチャーマーズへの誤記入であったことが明らかになった。修正後の得票では、マニング8,749票、チャーマーズ9,729票となり、チャーマーズが上回るようになった<sup>19)</sup>。チャーマーズが下院で宣誓して議席を得たのは、1884年6月のことであり、当選から1年以上経ての就任であった。

この遅延には事情があった。チャーマーズは1882年選挙に際し、不正投票者を処罰できる立場を求め、共和党政権の海軍長官ウィリアム・E・チャンドラーに書簡を送り、地区検事長特別補佐官の任を望んだ。1882年12月9日に任命を受けたものの、彼の関与した訴訟はいずれも有罪判決に至らなかった。問題は地区検事長特別補佐官が連邦職員であったため、



彼が下院議員に就任する際の資格要件に抵触したことである。チャーマーズは下院議員就任にあたって連邦職を辞したものの、選挙委員会の報告書提出が遅れ、彼の当選決議案が採択されたのは1884年6月25日であった。<sup>20)</sup>

1882年のミシシッピ州における連邦下院議員選挙では、7つの選挙区のうち5選挙区で民主党候補が当選した。黒人有権者が多数を占める郡から構成されていた第3選挙区では、共和党候補が勝利したが、他の選挙区では民主党が優勢であった。第2選挙区では、共和党内の黒人派閥がチャーマーズへの対抗馬として黒人候補H・C・カーターを擁立したが、彼の得票はわずか129票にとどまった。<sup>21)</sup>この結果は、チャーマーズがワシントンで共和党政権の海軍長官ウィリアム・E・チャンドラーと連携していた一方で、州内の共和党黒人派閥との協調関係構築ができなかったことを示している。

なお、ウィリー・D・ハルセルによれば、1882年の選挙で民主党候補者は47,960票、反民主党候補者は31,256票を獲得しており、この結果は再建期以来最大の反民主党票であった。<sup>22)</sup>すなわち、1882年選挙は黒人票の分断と制度的抑圧が進行する一方で、共和党勢力がなお一定の支持を維持していたことを示している。

以上のように、1876年から1882年にかけてのミシシッピ州における選挙過程は、暴力的な選挙妨害から、行政的操作、さらには地理的再編（ゲリマンダー）へと推移した。この過程において「法」は、暴力を抑止する手段ではなく、むしろそれを不可視化し、正当化する装置として機能し始めていた。その帰結が、南部で最初に州憲法によって黒人投票権を剝奪した1890年ミシシッピ州憲法であり、これを合憲とした *Williams v. Mississippi* (1898) 判決であった。この帰結を理解するためには、同時期に連邦最高裁判決群一とくに「権利」の意味を再定義した司法判断一を検討し、法的言説の次元のなかで「例外」や「排除」がいかに構造化されたのかを考察する。

## 2. 最高裁判決とカラーブラインドの論理

「法」が暴力を不可視化し、正当化する装置として作用した背景には、憲法修正第 14 条および第 15 条の適用をめぐる司法判断があった。これらの条項の解釈は、連邦制度の根幹に関わる問題であり、連邦最高裁はその判断を通じて、第一次再建の終焉を方向づける役割を果たした。その過程で、黒人の市民的権利は法的に再定義され、形式的平等の名のもとに実質的な排除が進行した。

合衆国最高裁は 1873 年 4 月 14 日、3 年の審理を経て、*Slaughterhouse Cases* において修正第 14 条に初めての解釈を下した<sup>24)</sup>。判決文を執筆したのは、医師出身で公衆衛生に詳しく、最高裁判事として 11 年の経験を持つサミュエル・F・ミラーであった。

ミラーはまず、ジョン・キャンベル弁護人による原告側の主張を退けた。食肉処理場法はクレセントシティ社に独占の特権を与えたものではなく、地域社会の基本的権利を侵害するものではない。食肉処理業者は職業を奪われたのではなく、特定の場所で合理的な使用料を支払って営業することを求められているにすぎない、と判断した。

さらに、同法はニューオーリンズの人口密集地から大量の不快物を遠ざけるための衛生立法であり、修正第 14 条はこの種の公共衛生上の規制を妨げるものではないとした。加えて、ミラーは修正第 14 条の目的は黒人の市民権確立にあり、白人業者の権利を保護するものではないと述べた。

判決の核心は、市民権を「合衆国市民権」と「州の市民権」に区別した点にあった。修正第 14 条が保護するのは前者に属する特権と免責特権のみであると解釈し、食肉処理業者が主張する就業権はその範囲に含まれないと結論づけた。こうして最高裁は、修正第 14 条の適用を大幅に制限する先例を打ち立てたのである。

この判断は人種を直接の争点としなかったが、結果として修正第 14 条を通じた連邦の権限を大きく狭めるものとなった。その後の *United States v. Reese* (1876) では修正第 15 条の適用が、*United States v. Cruikshank*

(1876) では暴力事件の処罰権限が、それぞれ制限された<sup>25)</sup>。最高裁は一連の判断を通じて、修正第 14 条・第 15 条に基づく連邦政府の介入を抑制し、州の裁量を拡大する方向を明確にしたのである。

1870 年のケンタッキー州レキシントン憲章では、投票条件として人頭税の納入が定められた。その結果、1873 年の選挙では黒人有権者の約 3 分の 2 が投票権を失い、民主党が勝利した。これに関連して、*United States v. Reese* ではリースら選挙管理人が黒人の投票を拒否したことが争点となったが、弁護側は「人頭税不納」であり人種差別を明示していないと主張した。最高裁は 1876 年、モリソン・R・ウエイ特長官のもとでこの主張を認め、修正第 15 条は選挙権を新たに付与するものではなく、人種による差別を禁じるにとどまると解釈した（ただしウォード・ハント判事は唯一反対意見を述べた）。

一方、1873 年ルイジアナ州コールファックスで起きた黒人百名以上の虐殺事件に関するクルークシャンク裁判でも、最高裁はウエイ特長官のもと全会一致で起訴状の欠陥を理由に被告を釈放した。同判決は、修正第 1 条および第 2 条は連邦政府による侵害のみに適用され、修正第 14 条は州による侵害を禁じるにすぎず、私人間の暴力には適用されないと解釈した。

州権の問題を含む食肉処理場事件、投票権の問題を含むリース事件、市民権の問題を含むクルークシャンク事件は、いずれも修正第 14 条・第 15 条の条文を狭く解釈した結果、条文上で保障されていた権利が、現実では保障されないという政治的アポリアを生み出したのである。デリダの言葉を借りると「正義はこれからやって来るという状態のままにある<sup>26)</sup>」。つまり、正義への到達が常に遅延させられるということである。最高裁のこれらの判決は、南部民主党の政策との連合を可能にし、次節で扱う黒人投票権剝奪の制度化へとつながっていく。

### 3. *Williams v. Mississippi* にみる形式的平等の完成

形式的平等とは、法文上（立法レベル）あるいは制度上（行政・司法レベ

ル)ではすべての人を平等に扱っているように見えるものの、社会的・歴史的な不平等を考慮せず、その是正を行わない法体制のあり方を指す。このような形式的平等の論理は、黒人投票権剥奪を可能にしたミシシッピ州憲法を容認した *Williams v. Mississippi* (1898) においても明確に現れている。同判決は、その法理においてカラープラインドであり、第2節で扱った先行判決—*the Slaughterhouse Cases*、*United States v. Reese*、および *United States v. Cruikshank*—において徐々に浸食されてきた修正第14条および第15条が本来有していた黒人救済のための法的機能を完全に奪い去り、その結果、黒人は法の内側にありながら同時に法の外部に置かれるという存在に追いやられたのである。<sup>27)</sup>

*Williams v. Mississippi* 事件は1896年、全員白人の陪審員による黒人ヘンリー・ウィリアムズの起訴に端を発している。ウィリアムズは、陪審員選出の手続きを規定した法律が違憲であるとして起訴却下を申し立てた。その主張の核心は、ミシシッピ州憲法および投票権関連法が、実質的に黒人の投票権を制限するものであるという点にあった。特に、陪審員資格を登録有権者に限定し、その資格判断を係官の裁量に委ねる条項を問題視した。<sup>28)</sup>

ミシシッピ州地方裁判所(第一審)は、ウィリアムズの主張を退け、起訴却下の申立てを認めず、絞首刑による死刑を宣告した。州最高裁判所は上訴を受理したが、下級審の判断を全面的に支持した。その結果、ウィリアムズは連邦最高裁判所に上訴したものの、同裁判所はミシシッピ州法がいかに適用されているかの問題への介入を拒否した。<sup>29)</sup> 以下では、最高裁判決において言及されたミシシッピ州憲法の第241条・第242条・第244条・第264条と、1892年ミシシッピ州法典の第2358条・第3643条・第3644条を検討する。後者の規定群は、前者に基づきその運用を具体化したものである。<sup>30)</sup> ミシシッピ州憲法から見ていく。

第241条では、州内の成年男性住民のうち、①米国市民で21歳以上であり、②この州に2年以上居住し、選挙区(または市・町)に1年以上居

住し、③公式な選挙人登録を済ませ、④贈収賄・偽証・横領などの犯罪歴がなく、⑤直近2年分の税金を納め、⑥その納税証明を提示できる者に限って有権者とする規定されている。これらすべてを満たす必要がある。

第242条は、州議会に有権者登録制度を整備する権限を与える立法委任条項になっている。さらに、登録申請者の資格を確認するための宣誓内容が規定されている。その中に、上記①②④を宣誓し、さらに「私は、投票権に関係する限りにおいて、自らの前歴に関するすべての質問に誠実に答えるとともに、この選挙区での市民資格を得る以前の居住地についての質問にも誠実に答えることを誓います」と宣誓しなければならない。

第244条は、1892年1月1日以降、上記①～⑥の資格に加えて、⑦州憲法の条文を読むことができる、⑧読み上げてもらった内容を理解できる、⑨その条文の意味を常識的に理解・説明できることのいずれかができなければいけない。

第264条は、大陪審員・小陪審員、いずれも投票資格を有する者であり、読み書きができる者でなくてはならないが、陪審員が資格を欠いていても、そのことを理由に起訴状や評決は無効とならないと規定されている。さらに、州議会が、巡回裁判所の陪審員選抜の立法を行うことが規定されている。次に1892年ミシシッピ州法典の三つの条項を見ていく。

第2358条は陪審員の資格および選定方法について定めている。各郡の行政執行機関は巡回裁判所の陪審員を選定し、名簿作成が義務づけられている。その際に、登録有権者名簿を基礎資料として用いることが認められている。

第3643条は選挙管理人の任命について定めている。3名の選挙管理人が、選挙管理委員会によって選挙区ごとに任命される。

第3644条は選挙管理人の義務と権限が定められている。選挙管理人は、選挙を公正かつ法に則って実施する責任を負い、有権者の資格を審査する権限を持つ。必要に応じて、資格に関する宣誓を求めることができる。

上述の州憲法や州法典の条項に対しウィリアムズが起訴却下の根拠とし

て唱えた異議はどのようなものであり、最高裁がその異議を却下した法理はいかなるものであったかを検討してみたい。

原告ウィリアムズは、自身を起訴した大陪審が、ミシシッピ州憲法とそれに基づいて制定された州法典の規定に従って選定・編成・召喚および職務付与されたことが、修正第 14 条に違反するとして、起訴棄却を求めた。彼によれば、有権者登録簿への記載は投票権の証拠とはならず、州法典第 2358 条に基づく手続きは、係官の裁量に左右されるものであり、恣意的な排除が可能であった。しかもワシントン郡には登録簿そのものが存在しなかった。原告はこのような裁量の付与が、「州憲法制定者による黒人投票権制限のための策謀」であると主張した。さらに彼は、憲法会議が 134 名の代議員のうち黒人は 1 名のみから成り、1890 年憲法が州民投票による批准を経ていないことを指摘した。新憲法に基づく 1891 年の選挙で選ばれた議会が、1892 年に制定した諸法は差別的意図に基づくものであったため、この起訴状を提出した大陪審に、黒人が偏りなく、選出されることはなかった。したがって、黒人は法の下での平等な保護を奪われており、修正第 14 条の平等保護条項に違反していると主張した。<sup>31)</sup>

原告はさらに、州憲法第 241 条で有権者の資格が規定され、第 242 条では、第 241 条の上記①②④の要件を満たしたうえで、なお以前の居住地について答える法的義務がなぜ存在するのかを問いただした。また、第 244 条は、第 242 条に基づき、登録官に対して無駄で不適切な質問 (vain, impertinent questions) を行うことを可能にする完全な裁量権を与えているため、登録官が意のままに有権者登録の可否を決定できる仕組みになっていると主張した。<sup>32)</sup>

最高裁は州裁判所の判断を支持し、ウィリアムズの主張を全面的に棄却した。ジョセフ・マッケナ判事の結論は、「ミシシッピ州憲法およびその法令は、文面上、人種間の差別を定めておらず、その実際の運用が不当であったことも示されていない。示されているのは、それらのもとで不当な運用が行われる可能性があったということにすぎない」ということであ

<sup>33)</sup>  
った。

マッケナ判事は、法の運用を問題視した判例として *Yick Wo v. Hopkins* (1886) に言及しつつも、*Williams v. Mississippi* との相違を強調した。*Yick Wo* 事件は、サンフランシスコ市が木造建物での洗濯業を禁じた条例の適用が中国人業者とそれ以外の業者とで異なっていたため、マシューズ判事がこれを修正第 14 条の平等保護条項違反と判断したものである。すなわち、法律が文面上は公平であっても、公的当局が偏見や敵意をもって不公平に運用すれば、それは修正第 14 条の平等保護条項に違反するとされた。しかし *Williams v. Mississippi* においてマッケナ判事は、ミシシッピ州憲法およびその法令は文面上、人種間の差別を定めておらず、その実際の運用においても悪意ある差別が行われたことは示されていないと述べた。示されているのは、あくまでその可能性にすぎないと判断し、したがって *Yick Wo v. Hopkins* の判断基準を *Williams v. Mississippi* に適用することはできないとしたのである。<sup>34)</sup>

批判的人種理論 (CRT) は、法的意識をめぐって批判的法学 (CLS) と同様に、法の政治性を主張する。ただし両者の相違は、CRT が人種の権力関係を分析に組み込む点にある。そのため CRT は、「最高裁が現行の人種体制を受容するのみならず、それを支持する法理へと急速に傾斜していることは、人種的正義に対する重大な挑戦として深刻に受け止める<sup>35)</sup>」。これは 20 世紀半ば以降の法的状況を評したものであるが、*Williams v. Mississippi* 判決に対する見解としても理解しうる。マッケナ判事は、法文上は平等に見えるとしても、その運用において差別を生じさせる可能性を不問に付した。

CRT は、最高裁が掲げるカラーブラインドな法理が、表面的には中立を装いながらも、マイノリティに一時的に与えられた政治的優位を奪い返すための投票権体制を生み出してきたとみなす。そして、カラーブラインドの法理そのものを、政治的権力関係の中で形成されたきわめて政治的な産物として理解する。このような CRT の立場は、最高裁が自らの保守的

な政治的意図を覆い隠すために構築してきた法理的欺瞞 (doctrinal mystification) を可視化し、分析するための概念的枠組みとなりうる<sup>36)</sup>。以下では、この CRT 的視座から第 2 節で扱った三つの判決の法理を検討し、それらが *Williams v. Mississippi* 判決と連動して、黒人を「法の内側に包含しながら同時に法の外に排除する」構造を制度として定着させ、修正第 14 条および第 15 条の実効性を徐々に空洞化させていった過程を明らかにする。

*The Slaughterhouse Cases* (1873) は、市民権を「合衆国の市民権」と「州の市民権」とに区別した。多数意見をまとめたサミュエル・ミラー判事は、両者が等しいならば原告の主張は認められるとしつつも、修正第 14 条が明示的に保護するのは合衆国市民としての特権および免除特権に限られ、州の市民権には及ばないと判断した。したがって、個人の自由や財産の保護など、市民的権利の規制を含む警察権は、各州の自治的権限として維持されるべきだとされた<sup>37)</sup>。CRT の立場から見ると、この判断は、修正第 14 条にもとづく連邦政府の介入を制限することで州権を強化し、その結果として南部諸州における白人支配の再確立と再建期の成果の後退を促進したと解釈できる。形式的には州の自治尊重を装いながら、実質的には黒人市民の権利保護を空洞化し、制度的な白人優位を維持する法的基盤を提供したとみなされる。

*United States v. Reese* (1876) は、修正第 15 条は投票権を創設する条項ではなく、既存の州法上の投票権行使において、人種・肌の色・以前の隷属状態を理由とする差別を禁ずるにすぎないと解釈した。最高裁はまた、「州が合衆国市民を投票から排除することは、人種を理由とする場合でも、年齢・財産・教育を理由とする場合と同様に、州の権限の範囲内であった<sup>38)</sup>」として、州の裁量を尊重し、連邦政府の介入を抑制した。CRT の立場からみれば、この判決は修正第 15 条の文言上の中立性に依拠することによって、制度的な人種的不平等を正当化し、結果として黒人の投票権剝奪を容認したものと位置づけられる。

*United States v. Cruikshank* (1876) は、修正第 14 条は州が適正手続き

なしに個人の生命・自由・財産を奪うことを禁ずるが、私人が他の私人の権利を侵害する場合については何も規定していない。<sup>39)</sup>「すべての市民が平等な権利を享受できるように保護する責務は、もともと各州が負っており、その責務はいまも州にある。連邦政府に課された唯一の義務は、州がその権利を否定しないよう確認すること」。<sup>40)</sup>CRT の立場からすれば、修正第 14 条を狭く解釈することによって、連邦ではなく州が黒人の権利を保護する責務を担っていると最高裁は判断し、白人による黒人への暴力に対し連邦による介入が抑制されたのである。黒人の権利を保護するのは州の義務である。

これら三つの判決は、いずれも人種を考慮しないカラブラインドな法理に基づいており、文言上一すなわち形式的には一平等を装っていた。しかしその平等は、実際には「平等の執行」を黙認あるいは隠蔽するためのものであった。この判決群に加わるのが *Williams v. Mississippi* (1898) であり、これらが相まって、法文上は黒人が白人と平等に扱われているように見せかけながら、すなわち黒人が法によって包摂されているように見せかけながら、実際には彼らを法の外に置く構造を制度として定着させたのである。その構造は 19 世紀に確立し、以後も長く持続してきたのである。

## おわりに

1875 年の公然とした暴力的な選挙妨害は、1876 年の政権交代を機に一時的に沈静化し、これに代わって行政的操作が選挙不正の主要な手段となった。たとえば、連邦下院議員選挙では、民主党のジェームズ・R・チャーマーズと共和党のジョン・R・リンチとの間で、リンチの得票が不当に減じられる事態が発生した。この問題は連邦下院選挙委員会による審査の結果、民主党側の不正が認定され、リンチの当選が確定した。また、別の選挙では、チャーマーズとマニングのように民主党内の派閥争いが選挙不正を誘発し、委員会によってマニング側の不正が暴かれ、チャーマーズが議席を得た。いずれの事例も、選挙現場を管理する行政担当者によって直

接、票が操作されたものであった。

さらに、黒人有権者の多い郡を白人有権者の多い郡と組み合わせることで、黒人候補への支持票を分散させる選挙区割り（ゲリマンダー）も行われた。この方法により、リンチは再選を阻まれることとなった。こうした行政的操作や選挙区改変は、ただちに黒人の政治参加を完全に排除するものではなかったが、時に白人民主党内の派閥が黒人支持層を抱える共和党と連携する契機ともなった。そのため、黒人の政治参加を制度的に封じる最終的手段として、1890年ミシシッピ州憲法に黒人投票権剝奪の条項が盛り込まれたのである。

この1890年憲法は、修正第15条への抵触を避けるため、文面上は人種に基づく差別的表現を用いなかった。同時期、連邦最高裁は、再建初期に黒人の権利を保障する目的で制定された修正第14条および第15条の効力を限定する一連の判決を下した。*Slaughterhouse Cases*、*United States v. Reese*、および *United States v. Cruikshank* の判決は、州権を強化する一方で、連邦の介入権限を弱体化させ、州による暴力や選挙不正に対して連邦政府が有効に対処できない法理を確立した。こうして、本来黒人の権利保障を目的としたこれらの憲法修正条項は、「形式的平等」の法理によって実効性を失っていったのである。

批判的人種理論の観点からすれば、この「法の中立性」こそがカラブラインドな法理を可能にし、人種という問題を制度の内部で不可視化・空洞化してきたと言える。1898年の *Williams v. Mississippi* 判決において、最高裁が1890年州憲法を合憲と判断したのは、まさに法文上の中立性のみ着目し、その運用上の差別的実態を看過した結果であった。このような形式的平等、すなわち法的カラブラインドの論理が、黒人を法の内部にありながら同時にその保護の外部に置くという構一すなわち排除を内包した法秩序のあり方を形成したのである。

## 注

- 1) William A. Mabry は次の論文でミシシッピ州の投票権剥奪について論じた。  
William A. Mabry, "Disfranchisement of the Negro in Mississippi," *Journal of Southern History* 4, no. 3 (Aug. 1938): 318-333.
- 2) J. Morgan Kousser は *The Shaping of Southern Politics: Suffrage Restriction and the Establishment of the One-Party South, 1880-1910* (New Haven, CT: Yale University Press, 1974) において、ミシシッピ州における黒人投票権剥奪は下層民衆の盛り上がりによって引き起こされたのではなく、民主党の指導者層、とりわけ黒人が多数を占める郡の指導者層が主導したものであると指摘している。
- 3) Steven F. Lawson, *Voting Rights in the South, 1944-1969* (New York: Columbia University Press, 1976) は、黒人投票権を剥奪した1890年のミシシッピ州憲法を合憲とした、1898年の *Williams v. Mississippi* 判決が、同州憲法の文言上での差別は行われていないことに着眼している。そのような状況を改善するための闘争を黒人たちが継続した結果、投票権法が成立したが、それが即座にレイシズムと経済的抑圧を解決したわけではないと指摘されている。
- 4) Alexander Keyssar, *The Right to Vote: The Contested History of Democracy in the United States* (New York: Basic Books, 2000) は、産業革命前後から20世紀末に至るまでの投票権拡大と制限のプロセスを詳細に描き出し、その過程を一貫した進歩ではなく「絶えず争われてきた歴史 (contested history)」として捉え直した。すなわち、投票権は不断に拡大してきたのではなく、政党政治の力学、経済的・社会的条件、人種や性別、階級をめぐる対立の中で、拡大と剥奪を繰り返す歴史として捉えられている。
- 5) Michael Perman, *Struggle for Mastery: Disfranchisement in the South, 1888-1908* (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 2001年) は、前著 *The Road to Redemption: Southern Politics, 1869-1879* (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1984) 同様、党派形成を単なる二大政党間の対抗ではなく、内部の分裂と派閥的力学から分析されている。Perman は、民主党における派閥抗争の激化は、ポピュリズム運動の台頭や共和党との連合の可能性によって引き起こされたと論じる。さらに、憲法改正による黒人投票権剥奪の制度化は、こうした抗争を収束させ、共通基盤の強化とその浸透を促したと捉えている。
- 6) アリ・バーマンは『投票権をわれらに一アメリカにおける投票権をめぐる闘い』(2020年) [原著 Ari Berman, *Give Us the Ballot: The Modern Strug-*

*gle for Voting Rights in America* (New York: Farrar, Straus and Giroux, 2015)] において、1965年投票権法の制定から現代に至る投票権をめぐる闘争を描いている。ジャーナリストとしての視点から、とりわけシェルビー判決以前から導入されていた有権者ID法が、同判決後には1965年投票権法による抑制を受けなくなり、その結果マイノリティと民主党に不利な状況を生じさせたことを指摘している。

- 7) J. Morgan Kousser, *Colorblind Injustice: Minority Voting Rights and the Undoing of the Second Reconstruction* (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1999), chap. 1, "VRA and the Two Reconstructions." 同章では、両再建期初期に付与された権利が連邦最高裁によって次第に抑制されていく過程が詳細に論じられている。Kousserは第一次再建におけるカラーブラインド・レイシズムを次のように描写する。「19世紀の南部白人民民主党員は、黒人の投票権を、人種を理由に明示的に否定することなく、その投票力を削ぐために少なくとも十一の法的手段を用いた。これらの多くは法律の文言上は中立的であり、今日の司法判断の状況では連邦裁判所によって支持される可能性がある」(25頁)。Kousserは、こうした記述を通じて、今日の司法判断にみられる保守化を、第一次再建期における司法の保守化と批判的に重ね合わせている。ただし彼は、法の中立性そのものを問い直す批判的人種理論(CRT)の視座を直接的には採用していない。本稿は、19世紀末の制度的投票権剥奪をCRTの視座からも分析する。
- 8) Testimony of William B. Redmond, *Report of the Select Committee to Inquire into the Mississippi Election of 1875*, vol. 1 (Washington, DC: Government Printing Office, 1876), Documentary Evidence, 85; 杉渕忠基「ミシシッピ州における政治暴力と1875年の共和党政権転覆計画」『亜細亜大学学術文化紀要』45(2025年、3月)、14-15頁。
- 9) William C. Harris, *The Day of the Carpetbagger: Republican Reconstruction in Mississippi* (Baton Rouge: Louisiana State University Press, 1979), 694-698.
- 10) *Jackson Clarion Ledger*, September 11, 1890; Vernon Lane Wharton, *The Negro in Mississippi, 1865-1890*, (New York: Harper & Row, 1965 [1947]), 206.
- 11) U.S. Congress, House, *Mississippi: Testimony as to Denial of Elective Franchise in Mississippi at the Elections of 1875 and 1876, Taken Under the Resolution of the Senate of December 5, 1876*, 44th Congress, 2nd Session, Mis. Doc. 45 (1877): 108-116. <https://archive.org/details/mississippitesti00unit>

- 12) U.S. Congress, House, *Contested-election Case of Lynch vs. Chalmers*, Committee on Elections, 47th Congress, 1st Session, Report 931 (1882): 1-23. <https://blackfreedom.proquest.com/contested-election-case-of-lynch-vs-chalmers/> 憲法についての言及は4、5、9頁。憲法の該当条項の文言は「各議院が、各々所属の議員の選挙、選挙開票報告、議員資格について判定を行うものとする」(第1条第5節)。なお、*Contested-election Case of Lynch vs. Chalmers* には、3名の少数派委員(いずれも民主党)による報告書も掲載されている。11名の多数派委員による報告書が委員会としての報告書である。報告書はリンチの訴えを認めたものであり、少数派はそれに同意できない委員がまとめたものである。本稿では前者をもとにしている。
- 13) U.S. Congress, House, *Contested-election Case of Lynch vs. Chalmers*, Committee on Elections, 1, 2; U.S. Congress, House, *Lynch vs. Chalmers: Testimony in the Contested Election of John R. Lynch vs. James R. Chalmers, from the Sixth Congressional District of Mississippi*, 47th Congress, 1st Session, Mis. Doc. 12 (1881): 1-3. <https://blackfreedom.proquest.com/testimony-in-the-contested-election-case-of-john-r-lynch-vs-james-r-chalmers-from-the-sixth-congressional-district-of-mississippi/>
- 14) U.S. Congress, House, *Congressional Record*, 47th Congress, 1st Session, April 29, 1882, 3450-3452.
- 15) *Ibid.*, 3449.
- 16) 1880年の第6下院議員選挙区を構成していたのは、北から Tunica、Quitman、Coahoma、Bolivar、Washington、Sharkey、Issaquena、Warren、Claiborne、Jefferson、Adams、Wilkinson の各郡であった。
- 17) *New York Times*, July 27, 1882.
- 18) Willie D. Halsell, "James R. Chalmers and 'Mahoneism' in Mississippi," *Journal of Southern History* 10, no. 1 (Feb. 1944): 50.
- 19) Halsell, "James R. Chalmers and 'Mahoneism' in Mississippi," 47-48; United States Congress, House, "Chalmers vs. Manning: Papers and Testimony in the Contested Election Case of James R. Chalmers vs. Van H. Manning, for the Second Congressional District, Mississippi", Serial Set No. 2213 (Washington, DC: Government Printing Office, 1884), 1-10. 以下、"Chalmers vs. Manning" と表記する。  
<https://babel.hathitrust.org/cgi/pt?id=uc1.b3986006&seq=7>
- 20) Halsell, "James R. Chalmers and 'Mahoneism' in Mississippi," 52-53; U.S. Congress, House, *Congressional Record*, 48th Congress, 1st Session, June 25,

- 1888, 5591-5606. 公務の兼職は憲法で次のように禁じられている。「アメリカ合衆国の下で公職についているいかなる者も、その在職中に、いずれの議院の議員になることはできない」(第1条第6節第2項)。
- 21) “Chalmers vs. Manning,” 9; Halsell, “James R. Chalmers and ‘Mahoneism’ in Mississippi,” 48-49.
- 22) Halsell, “James R. Chalmers and ‘Mahoneism’ in Mississippi,” 49.
- 23) 「暴力」は、身体的行為としての暴力にとどまらず、法制度や行政的規範が排除や沈黙を生み出す作用そのものを指す (Cf. Johan Galtung, “Violence, Peace, and Peace Research,” *Journal of Peace Research* 6, no. 3 (1969): 167-191.)。
- 24) 食肉処理場事件 (*Slaughterhouse Cases*) の要約は Ronald M. Labbé and Jonathan Lurie, *The Slaughterhouse Cases: Regulation, Reconstruction, and the Fourteenth Amendment*, abridged edition (Lawrence, Kansas: University Press of Kansas, 2005) にもとづいている；杉淵忠基『再建期のKKKとその後継者たち—政治暴力と黒人投票権—』(一橋大学博士論文〈未刊行〉、2024年)、101-103頁。
- 25) 合衆国対ハイラム・リースほか事件および合衆国対ウィリアム・クルークシャンクほか事件については Robert M. Goldman, *Reconstruction and Black Suffrage: Loosing the Vote in Reese and Cruikshank* (Lawrence, Kansas: University Press of Kansas, 2001) を参照している。
- 26) ジャック・デリダ (堅田研一訳) 『法の力』(法政大学出版局、2024年)、71頁。
- 27) 「法の内側にありながら同時に法の外部に置かれる」という位置づけについては、ジョルジョ・アガンベン (高桑和巳訳) 『ホモ・サケル』(以文社、2024年)、第二部「ホモ・サケル」、特に 103-124 頁参照。
- 28) *Williams v. Mississippi*, 170 U.S. 213 (1898), 213-214; Amanda Brown, “Williams v. Mississippi,” *The Mississippi Encyclopedia*, University of Mississippi, last updated April 15, 2018, <https://mississippiencyclopedia.org/entries/williams-v-mississippi/> Mississippi Encyclopedia, accessed October 14, 2025.
- 29) Ibid.
- 30) *Williams v. Mississippi*, 170 U.S. 213 (1898) の末尾には、本件訴訟に関係するミシシッピ州憲法の条項および 1892 年ミシシッピ州法典の条項が付録として掲げられている。
- 31) *Williams v. Mississippi*, 170 U.S. 213 (1898), 214-215.

- 32) Ibid., 220-221.
- 33) Ibid., 225.
- 34) Ibid., 223-225.
- 35) "Introduction" in *Critical Race Theory: The Key Writings that Formed the Movement*, ed. Kimberlé Crenshaw, Neil Gotanda, Gary Peller, and Kendall Thomas (New York: The New Press, 1995), xxvii.
- 36) Ibid., xxviii.
- 37) *The Slaughterhouse Cases*, 83 U.S. 36 (1872), 62-63, 73-74, 82.
- 38) *United States v. Reese*, 92 U.S. 214 (1875), 217-218.
- 39) *United States v. Cruikshank*, 92 U.S. 542, 554.
- 40) Ibid., 555.

# Shakespeare and Emotions: Pity and Empathy

Akiko Ikeda

## Abstract

Literature draws on emotions such as pity and empathy to shape how we connect with the characters. Shakespeare's plays have long been recognized for their emotional depth, particularly their ability to evoke pity and empathy. In *Romeo and Juliet*, the tragic fate of the "star-crossed lovers" elicits pity from the audience, while *The Merchant of Venice* offers a more complex engagement with empathy, particularly through the character of Shylock. His struggles bring to the fore questions about empathy. In other words, these plays raise questions about how literature shapes emotional responses and nuances pity and empathy as human experiences. This paper explores how these two plays engage with the concepts of pity and empathy, considering the historical meaning of these terms and their significance in Shakespeare's works.

Do not scorn pity that is the gift of a gentle heart!

<sup>1)</sup>  
- J.R.R. Tolkien

I do not ask the wounded person how he feels. I myself become the wounded person.

<sup>2)</sup>  
-Walt Whitman

Pity, sympathy, empathy, and compassion are often used interchangeably: however, they differ in the level of emotional involvement required. Pity demands the least engagement and allows for detachment, which may explain why it sometimes carries condescending or dismissive connotations.<sup>3)</sup> In contrast, empathy requires a deeper emotional understanding often rooted in

personal experience or a strong imaginative connotation.<sup>4)</sup> As pity involves a greater distance between the observer and the individual in difficult circumstances, it is easier not to take action in response. This distance may contribute to indifference or disengagement.

A question that emerges is what is necessary for us to feel pity, which requires the least degree of self-involvement. It seems we need to use our imagination, knowledge, and past experience. To trigger a sincere desire to live along with the difficult situations others face, we must first engage with their experience before trying to act on their behalf. Karen Gerdes, an Emeritus Professor in the School of Social Work at Arizona State University, whose research interest includes empathy and its measurement, suggests that pity is often used in a condescending way in order to express contempt towards people considered inferior.<sup>5)</sup> She also suggests that the words “pity” and “sympathy” have existed longer than “empathy,” which emerged at the start of the 20<sup>th</sup> century.<sup>6)</sup> She makes an interesting point in that “popular culture has largely taken over the defining of pity and sympathy, while science or evidence-based definitions are increasingly being used to define empathy.”<sup>7)</sup> So according to her opinion, when we experience the arts, read literature, and watch films, we are likely to feel pity or sympathy, rather than empathy or compassion, which require a higher level of personal involvement. Of course, there is individual difference due to one’s knowledge, experience, or past, but these situations leave us without the ability to change anything about it. This may relate to the fact we feel positive emotions, such as romance or joy, when we listen to sad music.<sup>8)</sup> This is because it is experienced from a safe distance from the threat, danger, or the sad events communicated. In any event, we project a feeling onto it using our imagination, experience, etc.

At the same time, we need to remind ourselves that pity is not by definition negative. A positive side to pity, induced by human kindness as suggested by Tolkien above, has also been affirmed. In some cases, our actions even transcend “pity” as writer Stefan Zweig states, suggesting two kinds of pity:

One, the weak and sentimental kind, [⋯] which is *not compassion*,

but only an instinctive desire to fortify one's own soul against the sufferings of another; and the other, the only one that counts, the unsentimental but creative kind, which knows what it is about and is determined to hold out, in patience and forbearance, to the very limit of its strength and even beyond.<sup>9)</sup>

The former focuses on the negative or weak aspects of pity, while the latter highlights something that goes beyond pity and approaches empathy or compassion. According to Gerdes, "empathy is an induction process or an experience derived from observation and shaped by the knowledge, memory, reason, and emotional understanding of the observer."<sup>10)</sup> Empathy requires more concrete evidence or more personal experience. Meanwhile, Paula Cohen points out that some marginal people or strangers in a society have been given a role to speak from their point of view, which should elicit empathy for people of a different background in Shakespeare's plays.<sup>11)</sup>

Literature draws on emotions such as pity and empathy to shape how we connect with the characters. Shakespeare's plays have long been recognized for their emotional depth, particularly their ability to evoke pity and empathy. In *Romeo and Juliet*, the tragic fate of the "star-crossed lovers" elicits pity from the audience, while *The Merchant of Venice* offers a more complex engagement with empathy, particularly through the character of Shylock. His struggles bring to the fore questions about empathy. In other words, these plays raise questions about how literature shapes emotional responses and nuances pity and empathy as human experiences. This paper explores how these two plays engage with the concepts of pity and empathy, considering the historical meaning of these terms and their significance in Shakespeare's works.

### **Pity through *Romeo and Juliet***

The word "pity" is derived from the Latin term, *pietas*, which originally conveyed notions of "goodness" and "kindness." Over time, its meaning expanded to include "feelings of tenderness for those who are suffering or have experienced misfortune."<sup>12)</sup> By the late 13<sup>th</sup> century, pity came to be asso-

ciated with “a desire to relieve the suffering of another person or the desire to show them mercy”<sup>13)</sup>. This historical evolution is essential to understanding how pity operates in literature, particularly in Shakespeare’s *Romeo and Juliet*. In this play, Shakespeare uses pity not only to evoke sympathy for the doomed lovers, but also to critique the rigid societal structures that lead them to their tragic fate. This section analyzes key moments in the play to explore how Shakespeare evokes pity from the audience, while also ultimately making a plea about the destructive consequences of unchecked conflict.

During the Renaissance, emotions were treated as a list of physiological conditions. The work of theologian Thomas Wright (c. 1561-1623) is well known for describing the passions of people of the era. For instance, he suggests women tend to feel more mercy and pity than men because of their complexion.<sup>15)</sup> The Italian artist Michelangelo sculpted the famous *Pieta*, one of his masterpieces, during the 15<sup>th</sup> century. It depicts the Virgin Mary holding a lifeless Jesus in her arms. The power of the *Pieta* is that it shows the existence of two human qualities: tenderness and reverence.<sup>16)</sup>

While German philosopher Friedrich Nietzsche would later view pity as a source of weakness and suffering,<sup>17)</sup> earlier literary traditions, particularly Renaissance literature, treated pity as a profound and even necessary emotion. A shrewd observer of human nature, Shakespeare embraced this older understanding of pity, using it as a dramatic tool to shape audience responses. In *Romeo and Juliet*, pity serves not only to provoke an emotional response, but also as a commentary on societal constraints and personal tragedy. Examining key moments in the play reveals how Shakespeare engages our sympathy for the lovers, highlighting the broader implications of pity in human relationships. In Shakespeare’s time, pity was often synonymous with sympathy,<sup>18)</sup> a term that conveyed a shared emotional experience rather than condescension. In Japanese, the closest equivalent of pity as sympathy is 同情 (Dō-Jō). The first kanji—同 (Dō)—indicates same, while the second—情 (Jō)—represents emotion. In other words, this concept refers to a person’s ability to feel something about the circumstances of others. It never has a cold or condescending tone in modern English usage as examined

<sup>19)</sup>  
above.

At this point, we can turn to a Shakespearean play that guides audiences toward pity and sympathy for the story's characters: *Romeo and Juliet*. Even those who have not read the play or seen it performed are likely familiar with its title and central characters. One reason for its enduring popularity is the range of adaptations across film, music, and ballet, and this popularity comes because of the already existing fame of the play. Translated into numerous languages, *Romeo and Juliet* remains one of the most popular plays ever.<sup>20)</sup>

The tragedy of *Romeo and Juliet* is set in the town of Verona, a city located in the northern part of Italy's Veneto region. Although it is unknown precisely when Shakespeare wrote the play, some scholars believe it was somewhere between 1591 and 1596<sup>21)</sup> during one of the several outbreaks of the plague that struck England during his lifetime.<sup>22)</sup> The play was first performed in 1597, and later the same year, a pirated edition of the play was published.

Shakespeare's England was a society in transition, emerging from rule under strict Catholic values and moving towards more progressive protestant ideas. For many years, England was under the control of the Holy Roman Catholic Church before King Henry VIII decided, for personal reasons, to part ways with Rome and become the head of the Church of England.<sup>23)</sup> Following the death of Henry VIII, his young and fervent Protestant son, Edward VI, ascended to the throne. Poor health cut his time in power short. Just before his death, Edward VI was persuaded to name Lady Jane Grey, a niece of Henry VIII, as the new queen. Unfortunately, her reign lasted only nine days. She was deposed and Queen Mary, a staunch Catholic, rose to power. Upon Queen Mary's death, her Protestant half-sister Elizabeth ascended to the throne. Although she exercised a moderate form of religious rule, the religious uncertainty of the time continued. Given the religious and political turmoil, Shakespeare was able to observe firsthand the power of emotions and how emotions often rule the minds of people, affecting the decisions they make. Interestingly, Shakespeare chose to distance himself from making one-sided political statements in his writing unlike his contemporaries who often took an anti-Catholic stance. Throughout his entire body of

work, Shakespeare rarely introduces religious differences and controversy. This fact has led many scholars to support the notion that we will never know what religious values Shakespeare upheld.<sup>24)</sup> With this in mind, it is perhaps best to assume a degree of ambiguity in this regard.

Coming back to the play, the two powerful families presented in *Romeo and Juliet*, the Montagues and the Capulets, have had a longstanding feud with each other for power and influence. Where Romeo belongs to the house of Montague, Juliet is a member of the Capulets. Romeo and Juliet's love emerges in defiance of their families' feud, making their relationship not only forbidden, but also fragile. It is precisely this fragility that enables Shakespeare to evoke pity: we witness the lovers' deep devotion, while recognizing the forces that threaten to tear them apart. Shakespeare heightens this sense of tragedy by placing Juliet in an impossible situation, trapped between her father's demands and her secret marriage to Romeo.

While her father, Lord Capulet, is negotiating the terms of marriage between Juliet and Paris, Juliet's suitor who is a count and kinsman of the Prince, a street fight breaks out between members of the feuding families. As Romeo kills Juliet's cousin Tybalt during the violence, he must flee the city of Verona for his life. Juliet then continues to do everything possible to avoid marrying Paris.

Even amidst this tense emotional background, "pity" is used only twice in this play. One of the instances is when Juliet tries to change her father's mind, but only succeeds in infuriating him. She laments how pitiful her world is and pleads to her mother to save her:

JULIET                      Is there no *pity* sitting in the clouds  
That sees into the bottom of my grief?  
O sweet my mother, cast me not away!  
Delay this marriage for a month, a week,  
Or if you do not, make the bridal bed  
In that dim monument where Tybalt lies.

LADY CAPULET    Talk not to me, for I'll not speak a word.

Do as thou wilt, for I have done with thee.

Exit. (3.5.196-203, *emphasis added*)<sup>25)</sup>

This scene of the play makes it clear that no one is trying to understand her situation—much less feeling any pity for her. Juliet's desperate plea to Lady Capulet serves as a direct appeal to a higher moral order, one ultimately made in vain. This is when we feel deep pity for Juliet, as she faces being abandoned by those who should protect her. She then goes to the Friar's cell. The Friar gives Juliet a specially designed potion and advises her to take it at night, explaining that the potion will make her appear to be dead. Juliet follows the Friar's advice, drinks the potion, and falls into a deep sleep. When members of her family find her, they believe she is dead.

Far away from home and unaware of the Friar's plot, Romeo only learns that Juliet has died. He understandably becomes desperate. Seeing no reason to go on, he goes the tomb where Juliet's body lies where he will end his life. He drinks poison and dies. A few moments later, Juliet awakens to find Romeo's dead body next to her. She decides to follow her lover. The following lines convey well her anguish and move us to feel pity for the two lovers:

Poison, I see, hath been his timeless end.-  
O churl, drunk all, and left no friendly drop  
To help me after? I will kiss thy lips.  
Haply some poison yet doth hang on them,  
To make me die with a restorative  
[kisses ROMEO]  
Thy lips are warm.

On saying these words, Juliet stabs herself with Romeo's dagger and dies. Their death eventually brings the family feud to an end.

Many may remember the Franco Zeffirelli's 1968 film adaptation of *Romeo and Juliet*. A key reason why Zeffirelli's adaptation is so well remembered may be attributed to the effect of the film's theme song. The compos-

er, Nino Rota, created a plaintive tune that moves listeners to feel pity for the two lovers. Some researchers suggest the significant influence of music on our emotions.<sup>26)</sup> The interweaving of music in the film evokes a powerful outpouring of emotions, including pity. Consider the banquet scene where Romeo and Juliet meet for the first time and exchange words in the form of a beautiful sonnet. Later, there is the famous balcony scene. As the story progresses, most of us expect in vain that the young couple will be together and find happiness. Instead, we are taken into a series of events that lead us to feel profound sorrow and perhaps shed tears. We learn that hatred can result in misfortune and destruction. Live productions lead us to feel a collection of universal emotions, such as sympathy, empathy and pity. This is possible because most of us at some point in our lives experience being in love or developing a strong affection for someone else. Despite differences in the way we interpret what we feel or their intensity, the connection we experience is real. We are able to place ourselves in the thoughts of the characters. Rae Greiner suggests that sympathy not only fosters emotional identification with fictional characters, but also leads us to think along with them. By rendering emotions abstract, feelings become distanced expressions that can be shared with others. In this way, sympathy can produce realism.<sup>27)</sup> This is how *Romeo and Juliet* evokes emotions, enabling us to connect with the characters and their feelings.

It is perhaps a good time to ask whether it's possible to feel an emotion without first-hand experience with what caused it. Romeo's answer is "no."<sup>28)</sup> Lamenting how he had to leave behind both his beloved Juliet and Verona, the city he has known all his life, Romeo says:

Thou canst not speake of that thou dost not feel.  
Wert thou as young as I, Juliet thy love,  
An hour but married, Tybalt murderèd,  
Doting like me, and like me banished,  
Then mightst thou speak, then mightst thou tear thy hair,  
And fall upon the ground as I do now,  
Taking the measure of an unmade grave. (3.3.64-70)

Romeo's lament suggests that true understanding comes only through direct experience. Yet Shakespeare's play challenges this idea by showing that pity allows us to connect with emotions *without* firsthand experience. Just as we feel Juliet's despair when she begs for mercy, we grieve with Romeo in his final moments. Through *Romeo and Juliet*, Shakespeare reminds us that pity is not, as Nietzsche claimed, a weakness but a bridge to deeper human connection. Feeling pity cultivates our ability to empathize, a crucial element of both literature and life.

There may be a facet of truth in Romeo's words. Some time ago, I listened to a podcast where guests spoke of losing someone during the COVID pandemic. One woman talked about her late husband, recounting how he used to cook for her and how enjoyable his company was. Another woman portrayed her late husband as being the person with whom she could talk about anything at the end of the day. Both echoed the words of Romeo: you will never be able to understand what it is like if you haven't gone through it yourself.

While I see a certain truth in this, I feel it's important to understand that when others say we cannot understand unless we experience what they have, it may be less a dismissal and more an invitation to use our emotional imagination and try to understand what it is to be in their shoes *without* direct experience. In other words, we can feel pity by drawing on our imagination and past experiences. Far from a sign of weakness, it seems to me that by first allowing ourselves to experience pity, we nurture emotions such as sympathy and empathy. One way to achieve this is through attentive listening. If a person experiencing loss benefits from sharing their stories, we have the opportunity to feel pity, which through attentive listening could even transform into empathy.

### **Empathy through *the Merchant of Venice***

Though widely used today, "empathy" has a relatively brief history. Coined in 1908 as a translation of the German term *Einfühlung*, the term originally referred to the emotions projected onto objects, such as architecture or art ("aesthetic sympathy"<sup>29</sup>). The German term is derived from the

Ancient Greek *empathia* (*en* meaning “in, at” + *pathos* meaning “passion or suffering<sup>30)</sup>”). This early meaning of empathy (“the ability to project one’s feelings onto objects<sup>31)</sup>”) persisted until World War II when it came to signify “the ability to understand and share the feelings of another.”<sup>32)</sup> This evolution reflects how deeply empathy is tied to human relationships, morality, and conflict—key themes in literature, Shakespeare’s *The Merchant of Venice* in particular. This play characterizes empathy as a complex force that can foster both understanding and division. By zooming in on the character Shylock, we can see how Shakespeare explores the limits and dangers of empathy, as well as its potential to humanize those marginalized by society.

As previously mentioned in the discussion of pity, both empathy and compassion require more personal engagement or active involvement. To clarify the difference, let’s suppose you are involved in a serious accident. Your personal network may respond in various ways. Some might simply text, expressing how unfortunate they find it for you. Their actions might make them feel better but change little for you. Some might even try to put themselves in your shoes and see it through your eyes. This is empathy. Then there may be those who engage with your situation and become more actively involved or stand next to you as you face the situation. They genuinely seek to understand what you need and look for way to improve your situation through active engagement. This is compassion.<sup>33)</sup> Psychologist Daniel Goleman introduces three types of empathy built on the model laid down by psychologist Paul Ekman. The first, called *cognitive empathy* (sometimes also as *perspective taking*) is the “ability to identify and understand other people’s feelings.”<sup>34)</sup> The second, *emotional empathy*, involves “physically feeling what others people feel, as though their emotions were contagious.”<sup>35)</sup> Finally, there is *compassionate empathy*, where we not only understand “a person’s predicament,” but are also “moved to help.”<sup>36)</sup> Compassionate empathy and compassion are comparable.

While we tend to focus on the beneficial sides of empathy, there is also a shadow side to it. Some point to the fact that we tend to reserve empathy for people *in-group* (“people like ourselves”). It is easier to feel empathy with an in-group person because you are more likely to have shared experiences.

This has actually been pointed out by proponents of empathy, arguing that empathy only moves in one direction, which leads to the exclusion of other groups.<sup>37)</sup> Paul Broom warns that empathy, while often seen as a virtue, is a double-edged sword—deep identification with one group can lead to hostility toward another.<sup>38)</sup> This insight is perhaps a key way of understanding Shylock’s character: empathy for his fellow Jews, shaped by years of mistreatment, fuels his desire for vengeance against Antonio. Shakespeare thus presents a complex view of empathy, showing how it can both humanize and divide.

This form finds resonance in racist and other exclusionary attitudes. Those who overly empathize *in*-group are likely to be aggressive towards those who are *out*-group. It may be that our ability to empathize requires acknowledging this possibility, as well as training our ability to foster feelings of empathy. In fact, Robert Green describes empathy as a “muscle that must be exercised,” emphasizing its emotional rather than intellectual nature.<sup>39)</sup> It is like a muscle—the less it’s used, the weaker and less flexible it becomes.

Shakespeare’s plays are rich with emotional complexity, offering audiences moments that challenge their capacity for empathy. As Cohen argues, Shakespeare’s plays often serve as exercises in empathy, challenging audiences to connect with characters across social and cultural divides.<sup>40)</sup> This idea rings true in *The Merchant of Venice*, where Shakespeare tests our ability to empathize with Shylock. First portraying Shylock as a victim, then later as a vengeful antagonist, the play forces us to actively navigate our emotional responses, much like Greene’s description of empathy as an evolving skill. The play forces us to question the limits of our own empathy.

Written between 1596 and 1598, *The Merchant of Venice* is one of two Shakespearean plays set in Venice, a cosmopolitan trade hub that fascinated Elizabethan audiences. Alongside *Othello*, Shakespeare raises sensitive issues around race and religious identity, particularly anti-Semitism. Though the term *anti-Semitism* was coined later in 1879,<sup>41)</sup> hostility toward Jews had long been present in Europe and England. A striking example is the case of Elizabeth I’s Jewish doctor, Rodrigo Lopez, who was accused and found

guilty—based on dubious evidence—of conspiring with Spain to poison the Queen. His execution in 1594<sup>42)</sup> likely shaped contemporary attitudes toward Jewish figures, which in turn influenced how audiences perceived Shylock.

In fact, about five years before *The Merchant of Venice*, Shakespeare's rival, Christopher Marlowe, wrote the story of a Jewish merchant titled *The Jew of Malta*, which became a huge success.<sup>43)</sup> Jews had not been officially allowed in England since 1290, so those of Jewish origin, including Dr. Lopez, might have been labeled *Marrano* (“a Jew who converted to Christianity to escape persecution, but who continued to practice Judaism secretly<sup>44)</sup>.”) Regardless, Dr. Lopez would have been labeled a Jew even if he were a Christian—just as Othello would forever be a “Moor”.

A Jewish money lender in Venice, Shylock lends money to Antonio, a merchant and anti-Semite,<sup>45)</sup> who needs the money to help his dear friend Bassanio. Throughout the entire interaction, Antonio's way of speaking and the words he uses are full of contempt and disgust towards Shylock. In the end, Shylock decides to lend money with no interest, which he usually imposes, but there was *one* condition: Shylock would claim a pound of flesh from Antonio's body if Antonio fails to repay the money in three months. Antonio agrees, and they enter into a bond.

Shylock's daughter, Jessica, is in love with Lorenzo. He is a Christian, as well as a friend to Bassanio and Antonio. She eventually runs away with Lorenzo taking the jewels and money Shylock kept in the house. An infuriated Shylock, discovering what his daughter has done, goes to the streets and screams. Antonio's friends mock Shylock's situation mercilessly. Shylock then rails bitterly against Christians:

I am a Jew. Hath not a Jew eyes? Hath not a Jew hands,  
organs, dimensions, senses, affections, passions? Fed  
with the same food, hurt with the same weapon, subject  
to the same disease, healed by the same means, warmed  
and cooled by the same winter and summer as a Christian  
is? If you prick us, do we not bleed? If you tickle us,  
do we not laugh? If you poison us, do we not die? And if

you wrong us, shall we not revenge? If we are like you  
 in the rest, we will resemble you in that. If a Jew  
 wrong a Christian, what is his humility? Revenge. If a  
 Christian wrong a Jew, what should his sufferance be by  
 Christian example? Why, revenge! The villainy  
 you teach me I will execute, and it will shall go hard but I  
 will better the instruction.  
 (3.1.53-66)<sup>46)</sup>

Shylock's powerful speech demands acknowledgment, confronting us with the humanity shared by Jews and Christians alike. His words strip away religious labels, reminding us that suffering transcends identity. This moment invites deep empathy, as we see Shylock not just as a villain, but as a man whose pain mirrors that of any marginalized group. Immediately following this speech, Shylock learns that Antonio's ships and the cargo intended to repay Shylock have been lost at sea. Antonio will be unable to live up to the agreement. Shylock falls into ironic raptures of delight about his enemy's misfortune, intending to exact revenge on Antonio by insisting on carrying out the agreement.

Shylock's deep hatred of Antonio and desire for revenge are rooted not only in the ill treatment Shylock himself has experienced, but in that faced by all Jews in Venice. Shylock's strong in-group empathy leads to an intense hatred of Christians. This is how Shakespeare complicates the sympathy we originally felt. Just as we begin to sympathize with Shylock, he then sets off to seek revenge, demonstrating how unchecked resentment can turn empathy into hostility. The same thing can be said about the way Christians are shown in the play. The behavior of Antonio and his friends is based on strong empathetic feelings for fellow Christians who have borrow money with interest from Shylock ("in-group" empathy). Bassanio asserts that no one he knows speaks ill of Antonio, which is true for the people around him. Bassanio, indeed, trusts fully and expects in Antonio's capacity to empathize with him not just financially but emotionally from the beginning saying thus: "to you, Antonio,/ I owe the most in money and in love; And from

your love I have a warranty/ To unburden all my plots and purposes” (1.1. 130-133). However, the same cannot be said about members of an out-group, which includes Shylock. Bassanio like the other Christians in the play, only consider Antonio’s fate and never Shylock’s misfortune. In this way, the play explores the paradox of empathy, which can unite, but can also deepen divisions when shaped by personal pain.

With Antonio unable to repay the loan, Shylock exacts revenge and demands a pound of his flesh without mercy. However, Portia, Bassanio’s wife, disguised as a young Doctor of Law, successfully defends Antonio in his case. A cruel sentence awaits Shylock, as he is then forced to convert to Christianity and has all of his fortunes confiscated. Shylock’s fate leaves a bitter taste. Before the sentence: however, Portia tries to persuade Shylock to take the generous offer made by Bassanio instead of pursuing Antonio’s fresh. Here is her well-known Mercy Speech:

The quality of merc is not strained;  
It droppeth as the gentle rain from heaven  
Upon the lace beneath. (4.1. 180-2)

Portia asks Shylock and the court to see mercy as a universal, shared human quality, beyond culture or legal divisions, which can be an empathetic recognition. However, it was impossible for Shylock to take in her advice, being merciful towards his enemy.

As discussed, Shylock’s speech is often seen as an appeal for empathy, but the irony lies in his own inability to extend it beyond his in-group. His suffering has not fostered compassion but rather deepened his desire for revenge. This illustrates the paradox of empathy: while it can create understanding, it can also fuel division when limited to a single perspective. In *The Merchant of Venice*, Shakespeare forces us to question whether empathy alone is enough to bridge societal divides or whether it must be paired with forgiveness to avoid the perpetuation of cycles of hate.

This paper explored pity through *Romeo and Juliet* and empathy in *The*

*Merchant Venice*, primarily through the character of Shylock. The key difference as discussed between these emotions lies in the degree of personal involvement. Although pity allows for a sense of detachment, requiring only imagination, it holds the potential to deepen into a more actively engaged response. Empathy, however, demands a deeper, more personal connection, often grounded in first-hand experience. At the same time, empathy is not purely virtuous, as it can also lead to intense emotions, such as anger or resentment toward those responsible for another's suffering.

Shakespeare offers no moral judgments nor definitive answers. Instead, his plays invite audiences to consider their own emotional responses, challenging them to consider whether they are merely passive observers feeling pity or truly feeling empathy. By portraying characters who inspire both reactions, Shakespeare compels us to question the extent to which we acknowledge and respond to suffering in the world around us. Do we stop at pity or, going further, do we let empathy move us toward deeper understanding and action? This is how Shakespeare's exploration of these emotions remains profoundly relevant, inviting us to consider how literature and by extension our own lives shape our capacity for emotional connection.

#### Notes

- 1 ) J.R.R. Tolkien. *The Lord of the Rings: The Return of the King*, "The Steward and the King," Book Six, Chapter 5.
- 2 ) Walt Whitman. *Song of Myself*, Section 33. *WhitmanWeb*, University of Iowa. <https://iwp.uiowa.edu/whitmanweb/en/writings/song-of-myself/section-33>
- 3 ) "Pity, Sympathy, Empathy, Compassion". *Huibee.com*, 2018. <https://huibee.com>
- 4 ) *Ibid.*
- 5 ) Karen E. Gerdes. 232. Examples of modern expressions include "I pity you," "For pity's sake," "I pity the fool," and "Get off the pity pot." Gerdes cites from J.D. Geller. "Pity, Suffering, and Psychotherapy." *American Journal of Psychotherapy*, 2006, 60, 190.
- 6 ) *Ibid.*, 234.
- 7 ) *Ibid.*
- 8 ) Kawanami et al. "Sad Music Induces Pleasant Emotion." *Frontiers in Psychology*, June 13, 2013, 1-15.
- 9 ) Stefan Zweig. *Beware of Pity*, 160.
- 10) *Ibid.*

- 11) P.M. Cohen. *Of Human Kindness: What Shakespeare Teaches Us About Empathy*. Yale University Press, 2021.
- 12) Karen E. Gerdes. "Empathy, Sympathy, and Pity: 21<sup>st</sup> Century Definitions and Implications for Practice and Research." *Journal of Social Service Research*. 2011, 37, 231.
- 13) Ibid., 231. Toria Johnson considers 'compassion' interchangeable with 'pity' in her book *Pity and Identity in the Age of Shakespeare*. D.S. Brewer, 2021, 11.
- 14) Erin Sullivan. "The Passions of Thomas Wright: Renaissance Emotions Across Body and Soul." *The Renaissance of Emotion*. Manchester University Press, 2015, 25-44.
- 15) Thomas Wright. *The Passions of the Minde in Generall. Corrected, enlarged, and with sundry new discourses augmented. With a treatise thereto adioyning of the clymatericall yeare, occasioned by the death of Queene Elizabeth* [electronic resource], Second edition, 1624, 40.
- 16) Karen E. Gerdes. 232.
- 17) Friedrich Wilhelm Nietzsche. *The Antichrist*, 572.
- 18) Richard Meek. "Sympathy: Titus Andronicus, The Comedy of Errors, Romeo and Juliet." *Shakespeare and Emotion*. 234.
- 19) See also my earlier paper, "How do the incestuous couples inspire our pity?" in Kiyoo, Asia University (43), 2-24.
- 20) Stanley Wells. "The Challenges of *Romeo and Juliet*." 4.
- 21) "Romeo and Juliet: Creation of the Play." *The British Library*. <https://www.bl.uk/treasures/shakespeare/romeo.html>.
- 22) The plague permeated London in 1563, 1578-9, 1592-3, and 1603. Jeffrey L. Sigman. *Daily Life in Elizabethan England*. Westport: Greenwood Press, 1995, 52.
- 23) He wanted to divorce Queen Katherine and marry Anne Boleyn, Queen Elizabeth's mother. The Catholic Church prohibited divorce.
- 24) "Italian Connection." This article first appeared in the show program for the 2006 production of *Romeo and Juliet*. <https://rsc.org.uk>.
- 25) All citations for *Romeo and Juliet* are taken from *Romeo and Juliet*. Edited by René Weis The Arden Shakespeare, Third series, 2012.
- 26) Federico Lauria. "Affective Responses to Music: An Affective Science Perspective." *Philosophies*, 2023, 8(16). <https://doi.org/10.3390/philosophies8020016>; Kawakami et al. "Sad Music Induces Pleasant Emotion." *Frontiers in Emotion Science* (a specialty of *Frontiers in Psychology*). 2013, 4. The latter article suggests we may actually feel positive emotions when we listen to sad music.
- 27) Rae Greiner. *Sympathetic Realism in Nineteenth-Century British Fiction*.
- 28) Richard Meek, 233.
- 29) Susan Lanzoni. "The surprising History of Empathy." *Psychology Today*, November 30, 2019. Accessed January 8, 2023. <https://www.psychologytoday.com/gb/>

- blog/empathy-emotion-and-experience/201911/
- 30) "Empathy." *Online Etymology Dictionary*, n.d. <https://www.etymonline.com/search?q=empathy>
  - 31) Susan Lanzoni. "The Origin of Empathy." *Yale University Press Blog*, November 21, 2018. <https://yalebooks.yale.edu/2018/11/21/the-origin-of-empathy/>
  - 32) "Empathy." *Oxford Dictionary of English*. Oxford University Press, 2005.
  - 33) Shane Sinclair. "Sympathy, Empathy, and Compassion: How Do They Differ and Which One Do People Prefer?" Compassion Research Lab, March 22, 2022. <https://www.youtube.com/watch?app=desktop&v=XXb2awAbmUA>
  - 34) Daniel Goleman. "Hot to Help: When can empathy moves us to action?" *Greater Good Magazine*, March 1, 2008. [https://greatergood.berkeley.edu/article/item/hot\\_to\\_help](https://greatergood.berkeley.edu/article/item/hot_to_help)
  - 35) Ibid.
  - 36) Ibid.
  - 37) Edwin Rutsch. "The History of Empathy by Susan Lanzoni - Interviewed by Edwin Rutsch." Edwin Rutsch, January 22, 2019. <https://m.youtube.com/watch?v=wo0yLWXyuVk>
  - 38) Paul Bloom. "Against Empathy: The Case for Rational Compassion." Carnegie Council for Ethics in International Affairs, December 19, 2016. <https://m.youtube.com/watch?v=yhCGmDJQRpc>
  - 39) Robert Green. "The Truth About Empathy." Robert Greene, August 22, 2023. <https://www.youtube.com/watch?v=J5UP872IeYA>
  - 40) P.M. Cohen (2021).
  - 41) Michael Berenbaum. "Anti-Semitism." *Encyclopedia Britannica*. January 4, 2023. <https://www.britannica.com/topic/anti-Semitism>.
  - 42) British Library. (n.d.). <https://www.bl.uk/collection-items/doctor-lopez-is-ac-cused-of-poisoning-elizabeth-i>.
  - 43) Robert A. Logan. "Introduction" to *The Jew of Malta: A Critical Reader*, First edition, Arden Early Modern Drama Guides. The Arden Shakespeare, 2013.
  - 44) The editors of *Encyclopedia Britannica*. "Marrano." *Encyclopedia Britannica*. July 20, 1998. <https://www.britannica.com/topic/Marrano>.
  - 45) "A person who is hostile or has a prejudice against Jewish people."
  - 46) All citations for *The Merchant of Venice* are taken from *The Merchant of Venice*. Edited by John Drakakis, The Arden Shakespeare, Third Series, 2011.

### Works Cited

- Adler, A. Cited in A.J. Clark. "Empathy and Alfred Adler: An Integral Perspective." *The Journal of Individual Psychology*, 2016, 72(4), 237-253. <https://doi.org/10.1353/jip.2016.0020>
- Berenbaum, M. "Anti-Semitism." *Encyclopedia Britannica*, n.d. <https://www.britanni->

- ca.com/topic/anti-Semitism, Accessed January 4, 2023.
- Bloom, P. *Against Empathy: The Case for Rational Compassion*. Carnegie Council for Ethics in International Affairs, December 19, 2016. <https://m.youtube.com/watch?v=yhCGmDJQRpc>, Accessed January 4, 2023.
- Cohen, P.M. *Of Human Kindness: What Shakespeare Teaches Us About Empathy*. Yale University Press, 2021.
- The British Library. "Doctor Lopez is accused of poisoning Elizabeth I". The British Library, n.d. <https://www.bl.uk/collection-items/doctor-lopez-is-accused-of-poisoning-elizabeth-i>, Accessed January 4, 2023.
- "Empathy". Online Etymology Dictionary, n.d. <https://www.etymonline.com/search?q=empathy>, Accessed February 1, 2023.
- . *Oxford Dictionary of English*. Oxford University Press, 2005.
- Gerdes, K.E. "Empathy, Sympathy, and Pity: 21st Century Definitions and Implications for Practice and Research." *Journal of Social Service Research*. 2011.
- Geller, J.D. "Pity, Suffering, and Psychotherapy." *American Journal of Psychotherapy*, 2006
- Goleman, D. "Hot to Help: When can empathy moves us to action?" *Greater Good Magazine*, March 1, 2008. [https://greatergood.berkeley.edu/article/item/hot\\_to\\_help](https://greatergood.berkeley.edu/article/item/hot_to_help)
- Green, R. "The Truth About Empathy." <https://www.youtube.com/watch?v=J5UP872IeYA>, Accessed August 22, 2023.
- Greiner, R. *Sympathetic Realism in Nineteenth-Century British Fiction*. Johns Hopkins University Press, 2013.
- "Italian Connection." <https://www.rsc.org.uk/romeo-and-juliet/past-productions/nancy-meckler-2006-production/article-italian-connection>, Accessed March 22, 2022.
- Johnson, Toria. *Pity and Identity in the Age of Shakespeare*. D.S. Brewer, 2021.
- Kawanami et al. "Sad Music Induces Pleasant Emotion." *Frontiers in Psychology*, June 13, 2013, 1-15.
- Lanzoni, S. "The Origin of Empathy". *Yale University Press Blog*, November 21, 2018. <https://yalebooks.yale.edu/2018/11/21/the-origin-of-empathy/>, Accessed January 9, 2023.
- . "The Surprising History of Empathy." *Psychology Today*, November 30, 2019. <https://www.psychologytoday.com/gb/blog/empathy-emotion-and-experience/201911/>, Accessed January 8, 2023.
- Lauria, F. "Affective Responses to Music: An Affective Science Perspective." *Philosophies*, 2023, 8 (16). <https://doi.org/10.3390/philosophies8020016>
- Logan, R. A. "Introduction" to *The Jew of Malta: A Critical Reader*, First edition, Arden Early Modern Drama Guides. The Arden Shakespeare, 2013.
- The editors of *Encyclopedia Britannica*. "Marrano". *Encyclopedia Britannica*, <https://www.britannica.com/topic/Marrano>, Accessed October 30, 2022.
- Meek, R. "Sympathy: Titus Andronicus, The Comedy of Errors, Romeo and Juliet."

- Shakespeare and Emotion*. Ed. Craik, K.A. Oxford Brookes U. 2020, 234-237.
- Nietzsche, F. W. *The Antichrist*, reprinted in the Portable Nietzsche. Penguin, 1954.
- "Pity, Sympathy, Empathy, Compassion". Huibee.com, 2018. <https://huibee.com>, Accessed January 24, 2023.
- Rutsch, E. "The History of Empathy by Susan Lanzoni - Interviewed by Edwin Rutsch". Edwin Rutsch, January 22, 2019. <https://m.youtube.com/watch?v=wo0yL-WXyuVk>, Accessed January 22, 2023.
- Shakespeare, William. *The Merchant of Venice*. Drakakis J ed. The Arden Shakespeare, Third Series, 2011.
- . *Romeo and Juliet*. Weis R. ed. The Arden Shakespeare, Third series, 2012.
- Sinclair, S. "Sympathy, empathy, and compassion: How do they differ and which one do people prefer?" Compassion Research Lab, March 22, 2022. <https://www.youtube.com/watch?app=desktop&v=XXb2awAbmUA>, Accessed March 22, 2022.
- Sigman, Jeffrey L. *Daily Life in Elizabethan England*. Westport: Greenwood Press, 1995.
- Sullivan, Erin. "The Passions of Thomas Wright: Renaissance Emotions Across Body and Soul." *The Renaissance of Emotion*. Manchester University Press, 2015, 25-44.
- Tolkien, J.R.R. *The Lord of the Rings: The Return of the King*, "The Steward and the King," Book Six, Chapter 5.
- Whitman, W. *Song of Myself*, Section 33. *WhitmanWeb*, University of Iowa. <https://iwp.uiowa.edu/whitmanweb/en/writings/song-of-myself/section-33>, Accessed February 7, 2023.
- Wells, Stanly. "The Challenges of *Romeo and Juliet*." Wells S, ed. *Shakespeare Survey*. Shakespeare Survey. Cambridge University Press; 1996,1-14.
- Wright, T. *The Passions of the Minde in Generall. Corrected, enlarged, and with sundry new discourses augmented. With a treatise thereto adioyning of the clymateri-call yeare, occasioned by the death of Queene Elizabeth* [electronic resource], Second edition, 1624, 40.
- Zweig, Stefan. *Beware of Pity* (e-book). Woolf Haus, 2020.



# 閉ざされた聖域をめぐる「天皇」言説

— ケンペル『日本誌』(1777-1779)と  
フレイザー『金枝篇』(1894)を比較する —

馬 場 浩 平

Der Diskurs über den „Tenno“ im geschlossenen Heiligtum –  
Ein Vergleich zwischen Kaempfers *Geschichte und Beschreibung  
von Japan* (1777-1779) und Frazers *The Golden Bough* (1894)

Kohei Baba

## Abstract

In dieser vorliegenden Untersuchung liegt der Fokus auf dem Tenno-Diskurs in der deutschsprachigen Fassung von Kaempfers *Geschichte und Beschreibung von Japan* (1777-1779), um zu untersuchen, wie die Beschreibung über die Heiligkeit des „Tenno“ in James George Frazers *The Golden Bough* (1894) rezipiert und interpretiert wurde. Kaempfers Darstellung des „Tenno“ besteht aus merkwürdigen Anekdoten über seine „mythische Abstammung von der Sonnengöttin Amaterasu Ōmikami“, das „Verbot des Verlassens des Palastes“ sowie über „Nägel, Bart und Haare“. Obwohl es kaum gelehrte Erläuterungen dazu gibt, lässt sich Kaempfers Schreibweise als eine Geste verstehen, die in der für die wissenschaftlichen Reiseberichte des 18. Jahrhunderts typischen Wahrnehmungsform des „Wunderbaren“, „Neuen“, „Abnormen“ und „Abweichenden“ wurzelt.

Im Gegensatz dazu erklärt Frazer in *The Golden Bough* den Hintergrund des „Menschengottes“ und die Entsprechung zwischen dem „Tenno“ und der Weltharmonie durch das Prinzip des „Analogiezaubers“. Diese Konzepte bieten somit einen Schlüssel zum strukturellen Verständnis der eigentümlichen Verhaltensformen, die Kaempfers „Tenno“-Diskurs in

sich birgt.

## 1. はじめに

18世紀から19世紀前半にかけて西洋で敢行されたグランドツアーは、ヨーロッパ諸国の周遊ではなく、イエズス会修道士たちが実践した宣教旅行でもなく、異郷を、すなわち非ヨーロッパ文化圏（アジア、アフリカ、アメリカ）を肉眼で知覚しようと試みる学術旅行が主流であった<sup>1)</sup>。それゆえ、ヨーロッパで出版されたおびただしい数の絵入り旅行記の記述は博物学の言説に根差していた<sup>2)</sup>。16世紀から17世紀までのヨーロッパでは、王侯貴族が私的に所有していた「ヴンダーカマー」（「驚異の陳列室」）に代表されるように、非ヨーロッパ文化圏から蒐集された陳列品は動物の剥製、科学用の器具、神話とキリスト教の融合した絵画や彫刻などのように、本物の事物を再現、編集、結合した表象文化が浸透していた<sup>3)</sup>。だが、18世紀から19世紀前半に出版された自然学者の旅行記には、何かの再現でもなく、何かによって参照もできない、異郷に実在する未知の事物や動植物や文化事象を肉眼で確認しようとする傾向が如実に表れている<sup>4)</sup>。それらの学術的な旅行記の多くは非ヨーロッパ文化圏を記述対象としているが、その記述に共通する知覚形式は今日の観光旅行のように、観光客たちによって見聞された主観的経験に基づく感想ではなかった<sup>5)</sup>。この時代の異国旅行記は「記述文学」と位置付けられ、そこには、何よりも博物学者の眼差しで検分する「事実」の記述が基調にあった。この記述的特性には大きく二つの側面があり、一つは現地特有の動植物（「鉱物界」「植物界」「動物界」）について分類学的に説明する「自然界の記述」（*historia naturalis*）、そしてもう一つは現地の統治形態、宗教、地理、歴史、文化について叙述する「人間社会の記述」（*historia civilis*）を特色としている<sup>8)</sup>。

ドイツの自然学者エンゲルベルト・ケンペル（Engelbert Kaempfer, 1651-1716）もこの博物旅行を敢行した一人だが、ケンペルが記述した日本の人間社会の一環である「天皇」言説は神秘性を帯びており、スコット

ランドの社会人類学者ジェームズ・フレイザーやオーストリアの精神科医ジークムント・フロイトによっても言及されている。本稿では特に、18世紀末から20世紀初頭までのドイツにおいて基本的な「日本言説」形成に寄与したケンペルのドーム版『日本誌』(*Geschichte und Beschreibung von Japan*, 1777-1779)に焦点を当て、そこで提示された日本の天皇にまつわる神秘性を帯びた言説を明らかにし、その後の「天皇言説」受容について、とりわけジェームズ・フレイザー (James George Frazer, 1854-1941) の『金枝篇』(*The Golden Bough*, 1894) を手掛かりに考察することを主眼としている。

## 2. ケンペルのドーム版『日本誌』における「天皇」言説

ケンペルのドーム版『日本誌』において、日本の「天皇」の称号は以下のように記されている。

まずここで述べておくべきは、この宗教的な世襲君主は、彼らが高貴な先祖の皇位と統治の同じ相続者であるにもかかわらず、「尊」 („Mikotto“) の称号を相続しなかったことだ。なぜならこの称号はもっぱら最初期とその後皇位を継承した一族の神的存在か半神的存在にのみ付与されているからだ。この宗教的な世襲君主は「尊」の縮小形である「帝」 („Mikaddo“) とのみ呼ばれるが、この称号のほかに「内」 („Dai“)、「王」 („Oo“)、「皇」 („Kwo“)、「帝」 („Tai“) という称号が与えられており、これらはすべて皇帝や、皇子、大君を意味する<sup>9)</sup>。

上記の引用で提示されている「宗教的な世襲君主」とは日本の「天皇」のことであるが、「尊」(みこと) という称号の付与対象が「神的存在」や「半神的存在」だとされている限りにおいて、ケンペルがかなり厳密に称号から天皇の属性を定義しようと試みていることが分かる。ケンペルは1690年から1692年の2年間、当時の日本を統治していた徳川綱吉の時代に日本を遍歴したが、天皇の歴史記述のために、現地の書物である『日本

書紀』の第1巻にあたる『神代記』（1599年）と『日本王代記』（1649年）を利用したといわれている<sup>10)</sup>。実際、ケンペルは『神代記』で記された第一期の神々の系譜である「天神七代」（„Ten D Sin Shtzi Dui“）と、さらに『日本王代記』に記された第二期の半神半人の年代記「地神五代」（„Dsi Sin go Dai“）を結合させながら、「独自の寓話的思考に基づく日本人の起源」として提示している<sup>11)</sup>。

だが、とりわけ上記の引用で興味深いのは、ケンペルがキリスト教徒として聖書の創造説を自らの世界観として認識していたにもかかわらず<sup>12)</sup>、「尊」の称号をめぐって「神的存在」や「半神的存在」という非キリスト教的な神話的存在を否定せずに認めている点であろう。18世紀の学術旅行記で記述された異国の文化や動植物に関する報告では、たとえそれらにまつわる現地の説明が滑稽な伝聞や現実的にあり得ない逸話であろうと、それらを偏見なく現地の書物から抜粋し紹介することは現地の「正当な情報源」の提示だと見なされた<sup>13)</sup>。ドーム版『日本誌』においても、ケンペルが現地の文化事象を提示する際、彼は日本古来の逸話や西洋の歴史的事象との対比を通じて説明することで、客観的な分析よりも、それらの挿話や対比から生じるイメージの方を重視しているように思われる。

ケンペルは西洋において比較的未知の存在である「天皇」のイメージを明確にすべく、以下のように解説している。

それから天照大神（„Tensio Dai Sin“）直系の最初に生まれた子孫である皇子だけが確実に最高位の権力と威信を持つことができたし、長子の特権という文字通りの原則にしたがって君主という生来の称号を所有するようになる。ここからこの皇子は日本国民最初の君主一族に属するようになり、その神聖さと高德を継承するに至ったのだ。またそれと同様に今日に至るまで、この家系の出身でありながらもとりわけ皇位を継承した皇子たちは極めて神聖なる人間（„heilige Person“）として、また同時に生まれながらにしての教皇（„gebohrne Pabste“）としても見なさ

れている。<sup>14)</sup>

ケンペルはこの箇所において、天皇家第一期の「天神七代」に属している「伊弉諾尊」 („Isanagi no Mikotto“) とその妻「伊弉冉尊」 („Isanami no Mikotto“) の長男であり「地神五代」の一人でもある「天照大神」の長子として<sup>15)</sup>、「皇子」が、すなわち「天皇」が初めて生まれたことを告げている。半神半人である「天照大神」の長子としてこの世に生を受けた「天皇」はもはや神の性質を帯びておらず、「人間一族」 („Menschengeschlecht“) の属性を持つようになる。<sup>16)</sup>しかし同時に、「天照大神」の特性はその半分が神性を帯びているため、その聖なる性質だけは子である人間「天皇」にも受け継がれる。ケンペルはその「神聖なる人間」としての「天皇」について明瞭なイメージを読者に与えるために、「天皇」を「教皇」だと比喩的に定義しているが、それにより否定的な定義ではない、西洋の宗教的最高権力者と日本の宗教的君主との対比を実現させている。聖書信仰を持っていたケンペルが聖なる神であるイエス・キリスト以外の人物を「神聖なる人間」と呼ぶことは、本来ならケンペルの信仰告白に反することであるが、ケンペルは18世紀の学術旅行記の原則である「人間社会の記述」をこの「天皇言説」というかたちで浮き彫りにすることで、読者に対し偏見なき日本の姿を明示することに成功している。しかもケンペルは日本の天皇の称号ならびに神々や地神の名称の日本語発音をそのままアルファベットに変換することで、西洋の言語にはない、日本語独特の表記や発音を再現しようとしている。なぜケンペルはこのような日本独特の発音を記述しようと試みたのだろうか。

アメリカの美術史家バーバラ・マリア・スタフォードは18世紀から19世紀前半の絵入り学術旅行記における図像において、「驚異」(the astonishing)、「新奇」(the novel)、「異常」(the unusual)、「偏倚」(the extraordinary) という側面が垣間見えることを示している。<sup>17)</sup>確かにドーム版『日本誌』には先述の『神代記』や『日本王代記』に基づいて独自に作成され



た「歴代天皇の年代記表」(図1)が挿入されているが<sup>18)</sup>、そこには当時の歴代天皇の名称がすべて漢字表記の転写とその名称の発音のアルファベット表記で構成されており、そのドイツ語とも日本語とも呼べない一種独特な文字表記の様相は「驚異」や「新奇」という知覚形式に裏打ちされているといえるだろう。

このスタフォードが提示した「驚異」「新奇」「異常」「偏倚」の知覚形式は図像にのみならず、言語テキストにも反映されている。先述のドーム版『日本誌』における「神聖なる人間」としての「天皇」言説が神学的にも生物学的にも説明されず、ある逸話によって解説されている点が注目に値する。

この聖人 („dieser Heilige“)はその両足が地面に触れると、自身の神聖さと威光を損なうものであると考えられているため、彼が赴くところならどこであろうと、人間の肩に乗って運ばなければならない。そのため、一般的に全くもってどうにも我慢ならないのは、この神聖化された人物が外気にさらされることである。なぜなら、太陽はこの聖人の頭部を照らし出す価値がまったくないと言われているからである。それどころか、この聖人の身体すべての部位にそのような神聖さが浸透しているため、敢えて聖人の頭髪は刈られず、髭も剃られず、爪も切られることがない。しかしそれにもかかわらず、彼の頭髪や髭や爪があまりに不名誉かつ無作法に伸ばし放題にならないよう、夜のうちにこれらはきれいに切り揃えられる。さらにこの聖人が例えば身を汚している場合、夜中にその汚れは落とされる。なぜなら、夜中のうちに聖人の身体から落とされた付着物は盗まれるものの、そのような窃盗はこの聖人の神聖さと威厳を損なわないからだ<sup>19)</sup>と日本人は言っている。

三位一体のキリスト教神学に根差した神人イエス・キリストの聖性と異なり、また古代ギリシアの哲学者プラトンのいう完全な最高存在たる「善のアイデア」<sup>20)</sup>とも異なり、ここで言及された「天皇」の身体的な神聖さは奇

妙な印象を与える。なぜなら、「天皇」がキリスト教やプラトン哲学における「全知全能の神」という特性を帯びていない人間存在であるにもかかわらず、外気に触れると汚れるという言い伝えによってのみ、その神聖さが保証されているように思えるからだ。つまり、「天皇」の神聖さは密室の中で守られるというわけである。ここで「天皇」の神聖さと閉鎖性の密接な関係が浮き彫りになってくる。ケンペルは続ける。

古い時代において、内裏 („Dairi”) は毎朝数時間、衣冠束帯の姿で、手足ならびに頭や目のほかに、身体のすべての部分を動かすことなく、一本の柱のように玉座に座る義務があった。このような方法で、内裏は自身の治世において平和と安らぎを保てると考えられていた。しかし例えば内裏がもし、時折左右どちらかにぐらつき、あるいはかなり長い間自身の所有物の一部に目を向けるなら、この国を荒廃させるために戦争、飢饉、火災ないしは他の大きな厄災が間近に迫っていると見なされた。だが後になると、天皇の冠が守護神像 („Palladium”) であり、この冠の不動性こそが治世中の平和を維持できることを日本人が発見した時、この厄介で骨の折れる公務上の義務から天皇を解放する方法が考え出され、天皇は何にも妨げられずに自由に働きことや淫蕩にふけることが可能となった。すなわち今では、天皇の冠は毎朝数時間、天皇の代わりに玉座に置かれているのである。<sup>21)</sup>

この記述において、ケンペルはあくまで「驚異」「新奇」「異常」「偏倚」という知覚形式に基づいて、玉座という閉鎖的な密室における「内裏」たる「天皇」の神聖さの保証と「天皇の身体の不動性」による平和の維持を述べ伝えているように思える。そして「天皇」の不安定な動きが日本という国全体を戦争などの厄災に導くという言及は何の地理学的な裏付けもない逸話だが、西洋の科学的な論理や修辞を前面に出さずにありのまま平明な文章で記述することは 18 世紀における学術旅行記の規範であった。<sup>22)</sup>

それでは、このようなケンペルの逸話による「天皇」言説はどのように

受容され、解釈されたのだろうか。

### 3. フレイザーの『金枝篇』における「天皇」解釈

ケンペルのドーム版『日本誌』が18世紀の学術旅行記特有の知覚形式に基づいて日本の「天皇」言説を逸話中心にありのまま提示していたのに対し、スコットランドの社会人類学者ジェームズ・フレイザーは、彼が1894年に出版した『金枝篇』において、別の観点からケンペルの「天皇」言説を扱っている。フレイザーは「王」と世界の関係に関して次のように述べている。

もしこう表現してよいのなら、王の人格は宇宙の動的な中心だと見なされ、その中心から天空の至る所へ力線が放射状に広がっている。その結果、王の——頭の向きを向けたり、手を上げたりする——どの動きも即座に作用し、自然の一部に深刻な混乱をもたらすだろう。王は世界の均衡を固定する支柱の先端部であり、彼の側で最も微かでも異常が起こると、虚弱な均衡は崩壊してしまう。したがって、この王によって最大の注意が払われないといけないし、また王自身への注意も最大限になされなければならない。王の生涯は、それが自発的であろうと不本意であろうと、王のあらゆる行為によって確立した自然の秩序が混乱し転覆してしまわないように、細部に至るまで徹底して強固に管理されなければならない。この種類の君主に属するのは、日本の宗教的皇帝である帝 („Mikado”) ないしは内裏 („Dairi”) が典型例である。帝は、神々と人間を含んでいながら宇宙を支配する太陽の女神の化身である。<sup>23)</sup>

先述のドーム版『日本誌』における「天皇の神聖性」と「玉座における不動性」に関する引用箇所は英語版『日本誌』(*The History of Japan*, 1727)にも存在するが、<sup>24)</sup>フレイザーはその箇所を引用するための導入として、ここではケンペルのドーム版『日本誌』では言及されていなかった「王」としての「帝」と「世界」の親和性を構造的に抽象化している。フレイザ

一にとって、ここで挙げられている「王」はただの国家権力者を意味しない。ケンペルがドーム版『日本誌』でも「天皇」の霊的な特性を「教皇」になぞらえたように、フレイザーは古代イタリアと古代ギリシアにおいて宗教的な職務である祭司が「王」の称号をも兼ね備えていたことを指摘している。<sup>25)</sup> 祭司は「供犠の王」(ラテン語で Rex Sacrificulus) とか「聖なる儀式の王」(ラテン語で Rex Sacrorum) と呼ばれた。<sup>26)</sup> この場合の「王」の祭司職とは、ユダヤ教におけるようにただ神と人間を仲介する聖職者のことではなく、「王」自らが臣民や崇拜者に祝福を授けられる「神」として立ち現れることであつた。<sup>27)</sup> 祭司である「王」による超人と不可視の存在への祈禱と生贄によってのみ、天候の変化や穀物の収穫が実現すると信じられていた。<sup>28)</sup> いわば祭司たる「王」は自然を突き動かせる「超自然的な代理人」 („supernatural agents”) であつた。<sup>29)</sup> だが、この超越存在としての「王」は聖書の神人イエス・キリストと異なる。『新約聖書』の「コロサイ人の手紙」1章16節から18節においてキリストの先天的な超越性と神性が記されているのに対し、<sup>30)</sup> フレイザーが示す超越存在としての「王」は哀れみや



【図2】 ウィリアム・ターナー 『金枝』(1834) (出典: Wikimedia Commons)

恐怖を抱く一般の未開人が継承できる職務であった。<sup>31)</sup>この「職務としての神」から生成した「人間神」(„a man-god”)というフレイザーの理念こそ、<sup>32)</sup>ケンペルがほとんど逸話でのみ浮き彫りにした日本の「天皇」言説の解釈を可能にするのだ。しかし、フレイザーのいう「超自然的な代理人」は、『金枝篇』の口絵としても掲載されたウィリアム・ターナー (Joseph Mallord William Turner, 1775-1851) の絵画『金枝』(The Golden Bough, 1834) (図2) において、祭司が戸外の森の中に立っているように外気に晒されていたはずなので、密室の玉座で聖性を保ち、国家の平和を維持するために柱のように不動の状態を保つ日本の「天皇」とは厳密に異なる。

この「天皇」の特異な性質を明確にするためにも、フレイザーによる以下の指摘は注目に値する。

霊的な力が浸透していたとされる世界観と並んで、太古の人間は別の観念を持っていた。その観念の中に、私たちは自然法則という近代的概念の萌芽や、人間の仲介者なしの一定の秩序の中で連続して起こる事象が見出されるだろう。ここで言及されている萌芽はいわゆる類感呪術 („sympathetic magic”) に関するものであり、これは迷信という最もおびただしい枠の中で大きな役割を果たしている。<sup>33)</sup>

フレイザーのいう「類感呪術」とは、先述の超越的存在としての「王」の媒介がない状況で、憎悪する人間を直接手にかけるのではなく間接的に「呪いの人形」を使って釘を打つ行為や、またモロッコの家禽に括り付けられる護符の入った袋などの、メディア (媒体) を通じて呪術を実行する手法のことである。逆に言えば、<sup>34)</sup>先述の「王」は、たとえ一般の未開人から現れるとしても、その未開人が霊的に優れているか、神的一样な高貴な家系に属しているのでもなければ、決して誰もが「王」や「神」のような職務に就けるわけではない。<sup>35)</sup>その一方で、「類感呪術」については、その呪術の力を信じる者であれば、誰もが「人間神」と同様の力を持つと夢想できる。<sup>36)</sup>ここまで来ると、呪いの人形や護符などの代用物を必要としない、

「類感呪術」を無媒介に身体化した「人間神」に関する叙述がなされるのも必然的な成り行きだといえるだろう。

フレイザーはこの「類感呪術」を身体化した「人間神」のことを、異教の神から神性や霊性を継承した器としての「人間神」から区別しながら、次のように説明している。

(…) 霊を吹き込まれた人間神が肉体を仮住まいとする異教の神からその神性を受け継ぐ一方で、もう一つの人間神は自身の超自然的な力を自然とのある一定の物理的な共感 („physical sympathy“) から引き出す。後者の人間神はただ神の霊を受容する容器ではない。身体と魂を含むこの人間神の全存在はとても繊細に世界の調和に適合するように調律されているため、彼が手で接触し頭の向きを変えると、宇宙における万物の構造に激震が走るようになっている。<sup>37)</sup>

この引用箇所でフレイザーは「類感呪術」を身体化した「人間神」の身体動きが世界の調和と連動していることを指摘している。「手による接触」と「頭の向きを変える動作」はいずれも、ケンペルによって述べられた「天皇」の言説における身体と世界の照応性と類似している。ケンペルのドーム版『日本誌』における、天皇が玉座からぐらついたり、他の場所に目を向けると「戦争、飢饉、火災ないしは他の大きな厄災」が間近に迫っているという奇妙な逸話は、フレイザーによれば、「類感呪術」を身体化した「人間神」という言説に還元される事象だということになる。さらに、この「類感呪術」という概念により、ケンペルが述べていた夜中に切り揃えられる「天皇」の「爪」「髪」「髭」も、「天皇」の身体それ自体が神聖でありながら、世界の調和を維持するための「類感呪術」そのものであるため、一般的な人間の爪、髪、髭とは異なることが分かる。しかも、「天皇」の代理として玉座に置かれた「冠」も、フレイザーによれば、「天皇」という「人間の仲介者」を必要としない「冠」というメディアのみによる「類感呪術」の体現ということになる。だが、ドーム版『日本誌』において記

述されていた逸話の一つである「天皇を外気に晒してはいけない」状況については、どのように説明すればよいだろうか。

フレイザーは「天皇」のこの逸話について検討する際、「天皇」の身体に浸透し「類感呪術」に裏打ちされた「聖性」に注目する。以下、吉川信による日本語訳をそのまま抜粋する。

(…)たとえば年頃の娘のように、神聖な人物が地面に触れてはならずまた太陽を見てもならないというのならば、その理由の一方は、聖なる存在が大地や天との接触により霊的美徳を枯渇させてしまえば、その存在は将来、自らの超自然的な力を発揮することができなくなる、という懸念である。人々の安全が、さらには全世界の安全までもが、その超自然的な力の適度な放出にかかっている、と信じられているからである。(…)つまり、その掟の目的は、聖なる人間の生命を守り、それによって臣民と崇拜者の生命を守ることである。尊いものでありながらも危険なものであるその生命が、安全かつ無害でいられる場所というのは、天と地のいずれにもない。そこで可能な限り、その二つの中間に吊り下げておこう、と考えられるわけである。<sup>38)</sup>

フレイザーは、「天皇」の「神聖さ」が大地と陽光によって損なわれるという迷信があったことを述べている。なぜなら外に広がる天と地は清い世界ではなく、汚れた場所だとみなされていたからだ。外の世界には、確かにゴミくずや病原菌、ならびに獰猛な獣や野蛮な人間たち、ひいては戦争や天災であふれている、という説明が考えられ得る。何よりも「天皇」が世俗の人間社会において、無害ではいられないということは容易に想像がつく。すなわち「天」も「地」も「天皇」にとっては安全ではないと信じられていたため、天と地の中間に位置する閉鎖された密室の玉座に不動の状態で見守られることしか選択肢が残されていなかった。ケンペルのドーム版『日本誌』において、この奇妙な「天皇」の閉鎖空間における行動様式は、フレイザーの『金枝篇』では、天と地のあいだでの「宙づりの状態」

を意味していたのである。

#### 4. おわりに

本稿では、ケンペルのドーム版『日本誌』における「天皇」言説に注目し、「天皇」の神聖さを述べる逸話がどのようにフレイザーの『金枝篇』に受容され解釈されたかを考察してきた。ケンペルの「天皇」言説は、「地神の天照大神による神話的な出自」「外出禁止」「爪、髭、頭髮」などをめぐる奇妙な逸話で構成されており、学知的な解説はほとんどなかったものの、その記述行為は18世紀の学術旅行記特有の知覚形式である「驚異」「新奇」「異常」「偏倚」に根差した身振りだったといえる。その一方で、フレイザーの『金枝篇』では、「人間神」の背景や「類感呪術」による「天皇」と世界調和の照応性が説明されていたので、それらの概念がケンペルの「天皇」言説にはらむ奇妙な行動様式を構造的に把握できる手掛かりとなった。今後はこの「天皇」言説をめぐって、さらなる考察を深めていきたい。

#### 注

- 1) バーバラ・M・スタフォード（高山宏訳）『実体への旅—1760年-1840年における美術、科学、自然と絵入り旅行記—』（産業図書）2008、vii頁。
- 2) 前掲書、2頁。
- 3) 前掲書、1頁。
- 4) Peter J. Brenner: *Der Reisebericht in der deutschen Literatur: ein Forschungsüberblick als Vorstudie zu einer Gattungsgeschichte*, Tübingen (Max Niemeyer Verlag) 1990, S. 1.
- 5) 例えば1847年に発行されたドイツの百科事典『ブロックハウス事典』第9版第14巻の「観光客」という項目には、「実際の観光客は、特定の目的、例えば学術的な目的を自分の旅行とは結びつけず、旅行をした後その旅行について記述できるように旅しているに過ぎないという点で、他の旅行者とは区別されている。この観光客は、様々な礼儀作法、習慣、見解において洗練された一般常識の持ち主であり、その叙述において可能な限り無限の主観性を発揮させていないといけない」とある。Vgl.) Touristen: In: *Allgemeine deut-*

*sche Real-Encyclopädie für die gebildeten Stände*. 9. Aufl. Bd. 14. Leipzig (F. A. Brockhaus) 1847, S. 352. また、18世紀から19世紀前半に至る「旅行」に関しては、以下の論稿を参照されたい。Vgl.) 馬場浩平「18世紀ドイツ語圏の日本像に内在するエピステーメー—ケンペルのドーム版『日本誌』とツェンペリーの『江戸参府随行記』を比較する」〔立教大学ドイツ文学研究室『立教大学ドイツ文学論集 ASPEKT』第50号(2017)3-23頁〕

- 6) Jürgen Osterhammel: *Die Entzauberung Asiens. Europa und die asiatischen Reiche im 18. Jahrhundert*, München (C. H. Beck) 2010, S. 179.
- 7) Carlos Rincón: *Exotisch / Exotismus* (Übers. v. Gerda Schattenberg-Rincón). In: *Ästhetische Grundbegriffe*. Bd. 2. Hrsg. von Karlheinz Barck. Stuttgart / Weimar (J. B. Metzler) 2001, S. 341.
- 8) Osterhammel (Anm. 6) S. 179.
- 9) Engelbert Kaempfer: *Geschichte und Beschreibung von Japan*. 1. Bd. Hrsg. v. Christian Wilhelm Dohm. Unveränderter Neudruck des 1777-1779 im Verlag der Meyerschen Buchhandlung in Lemgo erschienenen Originalwerks. Mit einer Einführung von Hanno Beck, Stuttgart (F. A. Brockhaus) 1964, S. 173-174. なお、ケンペルによってドイツ語訳された当時の日本の地名や人名などは判然としないものや誤記も多く含まれるので、次の翻訳を参考にしている。Vgl.) エンゲルベルト・ケンペル (今井正訳) 『日本誌——日本の歴史と紀行』上巻/下巻 (霞ヶ関出版) 1973.
- 10) Tadashi Imai: Anmerkungen zu Engelbert Kaempfers Geschichte und Beschreibung von Japan. In: *Engelbert Kaempfers Geschichte und Beschreibung von Japan. Beiträge und Kommentar*. Hrsg. von der Deutschen Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens (OAG), Tokyo. Berlin; Heidelberg; New York (Springer-Verlag) 1980, S. 102-103.
- 11) Engelbert Kaempfer (wie Anm. 9), S. 112-113.
- 12) Christian Wilhelm Dohm: Einleitung des Herausgebers. In: *Geschichte und Beschreibung von Japan*. 1. Bd. (wie Anm. 9), S. XV.
- 13) Osterhammel (Anm. 6) S. 145/ S. 149-150.
- 14) Engelbert Kaempfer (wie Anm. 9), S. 174.
- 15) Ebd. S. 112-113.
- 16) Ebd. S. 112.
- 17) バーバラ・M・スタフォード、前掲書、3頁.
- 18) Engelbert Kaempfer (wie Anm. 9), S. 185.
- 19) Ebd. S. 174-175.

- 20) アーサー・O・ラヴジョイ (内藤健二訳) 『存在の大いなる連鎖』 (筑摩書房) 2023、72 頁.
- 21) Engelbert Kaempfer (wie Anm. 9), S. 175.
- 22) バーバラ・M・スタフォード、前掲書、2 頁.
- 23) J. G. Frazer: *The Golden Bough. A Study in Comparative Religion, Vol. I.* London (Macmillan) 1894, S. 110.
- 24) Engelbert Kaempfer: *The History of Japan. Vol. I.* London (Printed for the Translator) 1727, S. 149-150.
- 25) J. G. Frazer (wie Anm. 23), S. 7.
- 26) Ebd. S. 7. なお、このラテン語の日本語訳は以下の訳書から抜粋している。  
Vgl.) J・G・フレイザー (吉川信訳) 『初版金枝篇 上』 (筑摩書房) 2003、28 頁.
- 27) Ebd. S. 8.
- 28) Ebd.
- 29) Ebd.
- 30) Die Luther-Bibel von 1534. *Vollständiger Nachdruck. 2. Bd.* Köln (Taschen) 2012, S. CVLIII.
- 31) J. G. Frazer (wie Anm. 23), S. 8-9.
- 32) Ebd. S. 9.
- 33) Ebd.
- 34) Ebd.
- 35) Ebd. S. 12.
- 36) Ebd.
- 37) Ebd.
- 38) J・G・フレイザー (吉川信訳) 『初版金枝篇 下』 (筑摩書房) 2003、305 頁.

[研究ノート]

## 匿名電子掲示板活用による ライティング力の変化と多重知能との関係

阿久津仁史

Changes in writing ability through anonymous bulletin board  
use and the relationship with Multiple Intelligences

Hitoshi Akutsu

### **Abstract**

The purpose of this study is to examine how the activity of providing feedback on English posts on an anonymous electronic bulletin board affected English writing ability for each intelligence characteristic, and to explore the factors behind this. Learners were asked to provide feedback to one another on English sentences posted on an anonymous electronic bulletin board six times, and their English writing ability was evaluated before and after the session by four native English speakers. The changes were then analyzed according to the eight intelligence traits of Gardner's Theory of Multiple Intelligences (1983). As a result, only learners with high intrapersonal intelligence showed a significant improvement in English writing ability at the 5% level. When the factors behind this improvement were analyzed based on a 25-item questionnaire, it was revealed that the top-performing scored higher on three items at the 1% level, two items at the 5% level, and four additional showed a significant trend toward higher scores for the this group.

### 1. はじめに

言葉である英語を習得するためには、他者との関わりが必要不可欠であ

るのは自明の理である。しかし、昨今のコロナ禍で、小中学生時代に自宅学習を余儀なくされたり、マスク着用を義務付けられたりして、他者との直接的な関わりに対する対人不安が増した学生が増えている（石川, 2022）という指摘があるのも当然であろう。その一方で、直接的な関係を持つのは苦手でも、スマートフォンやパソコン等を活用した SNS を通じて、言わば間接的な関わりを求めている学生は多い現状がある。

一方、コロナの影響で対面授業が減ってオンライン授業が増えた思わぬ副産物として、オンライン上で学生がお互いに学科紹介を行った後でお互いを評価しあう活動が、英語のライティング意欲の向上に効果があった（Kosaki, 2020）という指摘もある。それを踏まえれば、授業内掲示板を通じて学生同士がお互いを評価しあう活動を取り入れることにより、英語を書く意欲と能力が高まるのではないかと考えられる。しかし、多くの大学で取り入れているコースマネジメントシステム（以下 CMS）では、掲示板を匿名に設定することが難しい。厳密には匿名に設定することはできるが、匿名に設定すると完全に匿名になってしまい、授業者ですら誰が何を書いたかが把握できないため、掲示板が無法地帯のようになってしまう可能性があるのである。

しかし、Sakai という CMS では、掲示板を匿名に設定しても、授業者の画面には学生の名前が表示され、掲示板に何を書いても良い状態にはならないため、匿名掲示板を活用して学生同士が英語で交流することによって、英語を書く意欲や能力を向上させることができるのではないかと考えた。

## 2. 問題と目的

### 2.1 先行研究

英作文のフィードバックに関する研究は、教師による書面による修正フィードバックが学生の英作文スキル向上に効果がある（Hanafi et al., 2023）というように、教師による文法的な間違いの指摘が多い。しかし、

フィードバックは、単なる誤り訂正だけでなく、学習者が目標達成に向けて効果的に学ぶための支援全般を指す (Cervantes-Quispe et al., 2022) という知見もあり、特に、学習者同士のフィードバックは、語彙力強化や英語知識の定着に有効 (Jalalzai et al., 2023) で、学習者同士の協働的な関係を促進し (Gallant et al., 2024)、教員によるフィードバックの限界を補う (Reinholz, 2018)、という指摘もある。

また、匿名掲示板を用いたピアフィードバックは、学生の不安を軽減し (Shaheen et al., 2021)、学生が率直かつ建設的な意見を出しやすくし、課題の質や内容の改善につながり (Møller & Løvschal, 2020)、学生のライティングパフォーマンスを向上させるという (Lu & Bol, 2007)。

さらに、日本人学生の場合、近藤・楊 (2003) によれば、日本人大学生の英語不安として、①自分の英語力に対する不安、②他の学生からの評価に対する不安、③発話活動に対する不安、という3種類が指摘されている。その不安は、英語授業中のスピーキング活動で最も学習者は不安を感じやすい (佐々木, 1993) が、ライティング活動では書いたものが残っているため、他者に間違いを発見されるかもしれない、というような外国語不安の中の「否定的評価に対する不安」 (Horwitz et al., 1986) が助長される可能性がある。

以上の点を踏まえて、前述の Sakai という CMS を活用して、匿名授業内掲示板を設定し、それにテーマごとに英文を投稿し、投稿した英文に対してお互いにフィードバックをしあう、という活動を半期に6回実施したところ、事前事後で、英語ライティング力が有意に伸びた。しかも、上位群と下位群に分けて、分散分析もしたところ、両群ともに有意に伸びており、交互作用は有意ではなく、両群ともに同じように伸びていることが明らかになった (阿久津, 2025)。

しかし、学力以外に、そのような活動によってライティング力が伸びる学生の特徴が分かれば、このような活動を取り入れるべき英語の授業の特徴も分かるため、効率的・効果的な授業展開の示唆となる。そのため、学

生の特徴をつかむための手がかりとして、Gardner (1983) による多重知能理論の8つの知能特性に着目した。Gardner(1983) によれば、人間には、言語的知能・論理・数学的知能・空間的知能・音楽的知能・身体・運動的知能・対人的知能・内省的知能・博物的知能の8つの知能特性があり、人それぞれに強い特性や弱い特性があるという。しかし、阪井 (2018) によれば、(多重知能理論は) 学校教育より幼児教育・英語教育・そろばんなどの学校外での教育活動(教育ビジネス)で取り組まれる傾向があるという。それを踏まえて、阿久津 (2013) では、8つのうち運動的知能と博物的知能以外の6つの知能特性を考慮した語彙学習方略を取り入れたところ、知能特性ごとに効果的な語彙学習方略があることが明らかになった。しかし、大学教育における多重知能理論を踏まえた実践は、恒安・阿久津・鈴木 (2009) 以外にほとんど見当たらない。奥羽 (2018) は CLIL に多重知能理論をどのように応用するかを論じているが、実践ではない。

そこで、本研究では、匿名電子掲示板を活用したピアフィード・バックが英語ライティング力に対してどのように影響するかを学習者の知能特性ごとに検証する。

## 2.2 本研究の目的

以上の点を踏まえて、本研究の目的は以下の2つとする。

目的1 匿名電子掲示板上の英文投稿に対してフィードバックをする活動が、英語ライティング力にどのように影響したかを知能特性ごとに探ること。

目的2 影響が強かった知能特性があったとすれば、その要因を探ること。

## 3. 方法

### 3.1 参加者

参加者は、東京都内の大学で英語を専門としない文系学部所属の1・2年生131名であった(表1)。必修英語の通年履修者で、英語熟達度はTOEIC平均点で386点程度、CEFR基準でA2のレベルであった。

表1 参加者の内訳

	男性	女性	計
1年生	44	13	57
2年生	56	18	74

### 3.2 手順

まず、参加者には、Sakaiの電子掲示板の使用方法に関するガイダンスをおこない、その後、My favorite animal (好きな動物) に関して自由英作文を書かせた(図1)。その後、第3回目の授業から第13回目の授業までテーマを設定(動物・歌手・スポーツ選手・テレビ番組・お店・趣味・場所など)し、計6回、隔週で、次の授業開始時刻までに掲示板への英文投稿を指示した。授業内では、40分程度を用いて、各投稿に対するフィードバックを書き込ませた。英文投稿とフィードバックを行った翌週の授業では、各クラス1~2名程度優れた英作文やフィードバックの例を配布して紹介し、全体で共有した。14回目の授業では、1回目の授業と同じテーマで自由英作文を書かせた。

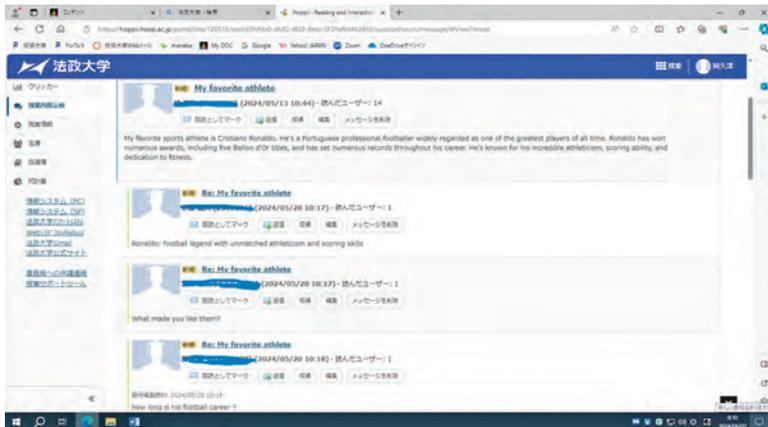


図1 電子掲示板の例

### 3.3 分析方法

英語ライティング力の変化は、4つの評価項目で測定した三田（2022）等があるが、5つの評価項目（「内容」・「論理／構成」・「語彙」・「文法」・「機械的技術」）を英語母語話者に評価してもらった杉田（2011）を参考にして、事前と事後のライティングを、4人の英語母語話者（米国人男性、カナダ人女性、英国人男性、オーストラリア人女性）に各項目を5点満点、計25点満点で採点してもらった（合計100点満点）。知能特性に関しては、森下他（2020）の質問紙を用いてアンケートを分析し、ライティングの変化に対して影響を与えた要因に関しては、最終授業で実施したアンケートを分析した。

## 4. 結果

### 4.1 研究1の結果

事前・事後のライティング課題と事後アンケートに取り組んだ113名の参加者を対象に分析した。

表2 母語話者評価得点

事前	Content	Logic	Grammar	Vocabulary	Mechanics	Total
A (US)	2.75	2.41	1.94	2.41	2.41	11.14
B(Canada)	2.66	2.73	2.6	2.78	2.78	13.59
C (UK)	2.81	2.42	2.29	2.27	2.27	12.09
D (OZ)	2.75	2.6	2.3	2.35	2.35	12.4

事後	Content	Logic	Grammar	Vocabulary	Mechanics	Total
A (US)	3.81	3.31	3.01	2.63	2.99	15.75
B(Canada)	3.15	2.88	3.35	3.1	3.12	15.6
C (UK)	3.28	3.07	3.19	3.06	3.02	15.59
D (OZ)	3.24	3.09	3.09	3.14	3.21	15.77

英語母語話者別得点は表2の通りであるが、その得点の信頼性を検証するために、 $\alpha$ 係数を算出した（表3）。各評価項目により、.657～.843のば

らつきはあるが、合計得点の $\alpha$ 係数が事前は.974、事後は.987と非常に高いため、その得点を分析に使用した。

表3 母語話者評価得点信頼性係数

	Content	Logic	Grammar	Vocabulary	Mechanics	Total
事前	.839	.776	.843	.821	.815	.974
事後	.765	.657	.767	.782	.782	.987

事前・事後でt検定を実施したところ、1%水準で事後の得点が有意に伸びていた ( $t(112) = 11.41$   $p = .001$ )。

次に、知能特性ごとに上位群と下位群に分けて、それぞれ分散分析を行ったが、その記述統計を表4～表11に、分散分析結果を表12～19に示した。

表4 言語的知能群別平均 (SD)

	上位群平均 n = 50	下位群平均 n = 63
事前	51.26(8.98)	49.05(12.48)
事後	66.96(13.51)	63.73(12.61)

表5 論理数学的知能群別平均 (SD)

	上位群平均 n = 50	下位群平均 n = 63
事前	51.2(9.57)	49.1(12.61)
事後	66.38(12.14)	63.73(14.34)

表6 空間的知能群別平均 (SD)

	上位群 n = 57	下位群 n = 56
事前	50.35(9.84)	49.7(12.3)
事後	65.88(13.93)	64.43(12.19)

表7 運動的知能群別平均 (SD)

	上位群平均 n = 56	下位群平均 n = 57
事前	48.21(11.63)	51.8(10.31)
事後	65.73(14.23)	64.6(11.9)

表8 音楽的知能群別平均 (SD)

	上位群平均 n = 50	下位群平均 n = 63
事前	50.84(9.94)	49.38(12.6)
事後	66.3(13.65)	64.25(10.11)

表9 対人的知能群別平均 (SD)

	上位群平均 n = 46	下位群平均 n = 67
事前	48.95(12.39)	50.76(10.11)
事後	66.48(13.07)	64.25(13.07)

表 10 内省的知能群別平均 (SD)

	上位群平均 n = 57	下位群平均 n = 56
事前	52(9.61)	48.02(12.16)
事後	68.26(13.65)	62(11.72)

表 11 博物の知能群別平均 (SD)

	上位群平均 n = 59	下位群平均 n = 54
事前	48.21(11.63)	51.8(10.31)
事後	65.73(14.23)	64.6(11.9)

表 12 言語の知能分散分析表

要因	パラメータ数	自由度	平方和	F 値	p 値
上位群下位群	2	1	0.01	0.12	0.73
事前事後	2	1	0.491	107.06	0.001**
上位群下位群×事前事後	2	1	0.21	2.4	0.12

表 13 論理数学の知能分散分析表

要因	パラメータ数	自由度	平方和	F 値	p 値
上位群下位群	2	1	0.13	0.001	0.977
事前事後	2	1	0.489	106.19	0.001**
上位群下位群×事前事後	2	1	0.13	1.48	0.26

表 14 空間的知能分散分析表

要因	パラメータ数	自由度	平方和	F 値	p 値
上位群下位群	2	1	0.01	0.74	0.786
事前事後	2	1	0.492	107.56	0.001**
上位群下位群×事前事後	2	1	0.003	0.357	0.55

表 15 運動的知能分散分析表

要因	パラメータ数	自由度	平方和	F 値	p 値
上位群下位群	2	1	0.24	2.688	0.104
事前事後	2	1	0.491	110.443	0.001**
上位群下位群×事前事後	2	1	0.004	0.488	0.486

表 16 音楽的知能分散分析表

要因	パラメータ数	自由度	平方和	F 値	p 値
上位群下位群	2	1	0	0.49	0.842
事前事後	2	1	0.49	106.63	0.001**
上位群下位群×事前事後	2	1	0.009	0.983	0.323

表 17 对人的知能分散分析表

要因	パラメータ数	自由度	平方和	F 値	p 値
上位群下位群	2	1	0.017	1.871	0.174
事前事後	2	1	0.5	110.867	0.001**
上位群下位群×事前事後	2	1	0	0.014	0.907

表 18 内省的知能分散分析表

要因	パラメータ数	自由度	平方和	F 値	p 値
上位群下位群	2	1	0	614	0.435
事前事後	2	1	0.493	107.985	0.001**
上位群下位群×事前事後	2	1	0.76	9.135	0.03*

表 19 博物的知能分散分析表

要因	パラメータ数	自由度	平方和	F 値	p 値
上位群下位群	2	1	0.01	0.12	0.73
事前事後	2	1	0.491	107.06	0.001**
上位群下位群×事前事後	2	1	0.21	2.4	0.12

分散分析の結果、全ての知能特性で事前事後は1%水準で有意な伸びを示したが、上位群と下位群の差は、やはり全ての知能特性で有意差は見られなかった。また、上位群と下位群の伸びが事前事後で違いがあるかを検証した交互作用は、内省的知能のみが5%水準で有意差が確認された。つまり、内省的知能が高い学生の方が、低い学生に比べて、有意な伸びを示していることが明らかになったのである。

## 4.2 研究2の結果

14回目の授業で、今回の活動に関して6件法（6：極めてそう思う、5：とてもそう思う、4：まあそう思う、3：あまりそう思わない、2：ほとんど思わ

表 20 上位群平均値と下位群平均値の質問項目別 t 検定結果（両側検定）

	質 問 内 容	下位群	SD	上位群	SD	p 値
1	新しい単語や熟語が身に付いた（思い出した）	4.42	0.61	4.75	0.75	0.06 †
2	文法や語法が身に付いた（思い出した）	4.16	0.59	4.51	0.97	0.05 †
3	正確な英文が書けるようになった	4.00	0.55	4.31	0.86	0.07 †
4	様々な表現の英語を書くようになった	4.53	0.62	4.80	1.44	0.20
5	話の流れを考えて英文を書くようになった	4.58	0.89	4.96	1.08	0.06 †
6	難しい英文（単語や表現）を書くようになった	3.56	1.12	3.75	0.95	0.36
7	間違いを気にしないで書くようになった	4.53	1.03	4.78	1.17	0.25
8	伝えたい内容を重視して書くようになった	4.51	0.57	4.96	0.64	0.01 **
9	英文を書くスピードが速くなった	4.18	0.83	4.35	1.19	0.40
10	英文を書く量が増えた	4.24	0.87	4.78	1.09	0.01 **
11	自分の書くフィードバックの内容や種類が増えた	4.44	0.75	4.75	0.99	0.12
12	英文を書くことに対する苦手意識が軽減した	4.20	0.94	4.51	1.29	0.16
13	英文を速く読めるようになった	3.91	1.17	4.49	1.13	0.01 **
14	読む際に英文の間違いを気にするようになった	3.91	0.86	4.25	1.39	0.12
15	読む際に英文の内容を重視するようになった	4.33	0.68	4.57	1.17	0.24
16	英文を読むことに対する苦手意識が軽減した	4.29	1.21	4.47	1.41	0.44
17	匿名なので間違いを気にせずに書くことができる	5.16	0.86	5.29	0.81	0.46
18	匿名なので多少盛って書くようになった	4.44	2.03	4.39	2.12	0.86
19	匿名なので読む際に本当かどうか気になるようになった	3.91	1.76	3.67	2.51	0.42
20	良い例として紹介される英文の方が役に立った	4.49	0.98	4.94	0.86	0.02 *
21	自分が良いと思った英文の方が役に立った	3.84	0.68	4.06	1.06	0.27
22	英語を書く意欲が高まった	4.20	0.75	4.51	1.05	0.12
23	英語を読む意欲が高まった	4.40	0.84	4.75	1.27	0.11
24	自分の英語力を高めたいと思うようになった	4.98	1.07	5.16	0.93	0.38
25	（前と比べて）英語の学習量が増えた	4.17	1.00	4.71	1.41	0.02 *

\*\*p<0.01 \*p<0.05 †p<0.1

ない、1: 全くそう思わない) で行ったアンケートを取り、その結果を内省的知能の上位群と下位群でt検定で比較した(表20)。その結果、「8 伝えたい内容を重視して書くようになった」、「10 英文を書く量が増えた」、「13 英文を速く読めるようになった」の3項目が1%水準で上位群が高かった。また、「20 良い例として紹介される英文の方が役に立った」と「25 (前と比べて) 英語の学習量が増えた」の2項目が5%水準で上位群が高かった。さらに、「1 新しい単語や熟語が身に付いた(思い出した)」、「2 文法や語法が身に付いた(思い出した)」、「3 正確な英文が書けるようになった」、「5 話の流れを考えて英文を書くようになった」の4項目が、有意傾向で上位群が高い傾向にあった。

## 5. 考察

### 5.1 成果

本研究の結果、まず、研究1において、内省的知能が高い学習者のみが、低い学習者に比べて5%水準で有意に伸びることが明らかになった。つまり、匿名電子掲示板を使って英語でコメントフィードバックをしあう活動は、英語ライティング力を伸ばすという視点で考えた場合、内省的知能が高い学習者には特に有効であるということである。

その要因を研究2で探るために、25項目の事後アンケートを分析したところ、「1 新しい単語や熟語が身に付いた(思い出した)」、「2 文法や語法が身に付いた(思い出した)」、「3 正確な英文が書けるようになった」、「5 話の流れを考えて英文を書くようになった」、「8 伝えたい内容を重視して書くようになった」、「10 英文を書く量が増えた」、「13 英文を速く読めるようになった」、「20 良い例として紹介される英文の方が役に立った」と「25 (前と比べて) 英語の学習量が増えた」の9項目で、内省的知能が高い学習者が有意に高かった。つまり、本活動を通して、内省的知能が高い学習者は、「新しい単語や文法を思い出したり身に着けたりした結果、話の流れを考え、伝えたい内容を重視して、正確な英文をたくさん書けるようにな

った」と認識しており、そのために、「良い例として紹介される英文を参考としており、結果として英語学習量が増えて英文を速く読めるようになった」と考えているのである。

Gardner (1983) によれば、内省的知能が高い学習者は、自分の気持ちや考えを深く理解し、自分自身と向き合うことが得意で、適した学習方法は読書や日記を書くことであり、フィードバックを求め、それにより自己認識を深める、という。ということは、内省的知能が高い学習者にとって、今回の匿名電子掲示板を活用したコメントフィードバックを英語でしあう活動は、最適な学習法の一つであったと言えよう。もちろん、内省的知能が高い学習者に限らず、今回の活動の結果、学習者の英語ライティング力は事前事後で有意な伸びを示したが、特に指導法が有効な学習者の存在が明らかになれば、事前に学習者に知能特性ごとのアセスメントを行うことにより、より効果的な指導法を取り入れていく教育の可能性も広がるだろう。

最後に、次のような学生の感想があった。

「匿名機能があると、人前で自分のことを話すのが苦手な人でも、自分についてさらけ出せる貴重な場だなと思いました。また、コメントについても、今までは、先生に提出するだけで終わっていましたが、先生以外の人にも読んでもらえ、自分について興味を持ってもらうことが、とても嬉しかったです。誰かからの関心も欲しいが、自分を知られすぎるのが苦手な私には、すごくよかった方法だと思いました。」

この感想の学生が内省的知能が高いかどうかは不明だが、前述した石川 (2022) の指摘のような学生の実態を鑑みれば、学生同士に直接会話をさせるような学習法と同時に、本研究のように間接的に関わりを持つ機会を与えるような学習法も検討していく必要があるだろう。

## 5.2 課題

まず、Gardner (1983) でも、知能特性の男女差は示されていないが、

本研究においては、参加者に男女の大きな偏りがあったため、結果に影響を与えた可能性がある。というのは、阿久津(2014)によれば、中学生の場合、よく活用している語彙学習方略が、性差による違いがあることが明らかになっており、知能特性の男女差ではなく、好んだり頻繁に取り入れたりする英語学習方法に性差があることが推測されるのである。そのため、参加者を男女同数にして、再度検証することが望ましいであろう。それによって、匿名の掲示板を活用したコメントフィードバックの活動が、より効果的な学習者が明らかになり、学習者にとって効果的な教育活動を提案することにつながるであろう。

また、参加者をもっと増やして検証することがあげられるだろう。恒安他(2009)では、工学部の学生を対象に実験群と統制群を設けて多重知能理論に基づく英語指導を行ったが、その2クラスの知能特性の平均はとても似通っていたとされている。そのことから推測できることは、学部学科によって知能特性の偏りがある可能性があるということだ。今回の結果は、大学の特定の学部の僅か113名の参加者を対象にした実践の結果であり、とても一般化できるとは考えにくい。他学部の学生を対象に本研究を実施すれば、別の結果になった可能性もあるだろう。そのため、さらに参加者を増やして検証することによって、より普遍的な結果からの示唆が期待できるであろう。

最後に、ライティングのテーマによっての差も検討する必要があるだろう。今回は、自分の好きな動物やスポーツ、レストラン、テレビ番組等、英語で書きやすくコメントもしやすいテーマにしたが、例えば、年功序列が良いか成果主義が良いか、などの社会的テーマについて書かせた場合、どのような違いがあるかの検証も必要であろう。それは、経済学部の学生には経済に関わるテーマを書かせる、というように、学生のニーズや実態に応じた英語学習方法の展開にもつながる可能性がある。というのは、幼稚園教諭養成の学部等では、それに合った教科書を使用する例も見られるが、多くの大学の一般英語の授業では、学生の学部に関係なく教員が使い

たい教科書が使用される場合があるためである。今回の知能特性に応じた英語学習法の検討は、そのような現状に一石を投じる小さな一歩になればと願う次第である。

## 謝 辞

本研究は、2023年度から2025年度の日本学術振興会科学研究費基礎研究(C)(課題番号23K00725)の助成を得ている。

## 引用文献

- 阿久津仁史(2013)「語彙学習法に対する学習者の知能特性の影響」『中部地区英語教育学会紀要』42, 115-122.
- 阿久津仁史(2014)「中学生の英語語彙学習方略の検討：性差と学年差の視点から」『中部地区英語教育学会紀要』43, 101-108.
- 阿久津仁史(2026)「電子掲示板の匿名性を活かしたコメントフィードバックの英語ライティングに対する影響」『獨協大学 情報学研究』15 (投稿中).
- Cervantes-Quispe, M. D. C., Ochoa-Santos, L. S., Conde-Beltran, Y. V., Chavez-Pinillos, F. E., & Chiparra, W. E. M. (2022) Educational Feedback in Teaching English. In *NeuroQuantology* (Vol. 20, Issue 5, pp. 575-581). NeuroQuantology Journal. <https://doi.org/10.14704/nq.2022.20.5.nq22211>
- Gallant, A., Erdman, L., McBeth, L., Ngov, L.-K., & Misky, G. (2024). Peer feedback. In *JAAPA* (Vol. 37, Issue 3, pp. 1-4). Ovid Technologies (Wolters Kluwer Health). <https://doi.org/10.1097/01.jaa.0001005628.16104.53>
- Gardner, H. (1983) *Frames of Mind: The theory of multiple intelligences*. New York: Basic Books.
- Hanafi, H., Pomalingo, R., & Bantulu, Y. (2023) Teacher's Feedback on Learners' English Writing Compositions. In *Ideas: Jurnal Pendidikan, Sosial, dan Budaya* (Vol. 9, Issue 2, p. 673). Ideas Publishing. <https://doi.org/10.32884/ideas.v9i2.1268>
- Horwitz, E. K. 1986 Preliminary evidence for the reliability and validity of a foreign language anxiety scale. *TESOL Quarterly*, 20, 559-562.
- 石川悦子(2022)「コロナ禍における大学生の学生生活に対する不安感とストレス」こども教育宝仙大学紀要13巻 13-20.
- Jalalzai, N. N., Kanwal, N., & Ashraf, Z. (2023) Peer Feedback Practices in Im-

- proving English Vocabulary Learning among ESL Learners. In *Global Language Review: Vol. VIII* (Issue II, pp. 100-109). Humanity Only - HO. [https://doi.org/10.31703/glr.2023\(viii-ii\).10](https://doi.org/10.31703/glr.2023(viii-ii).10)
- 近藤真治・楊瑛玲 (2003) 「大学生を対象とした英語授業不安尺度の作成とその検討」. *JALTJournal*, 25(2), 187-196.
- Kosaki, Junko (2020) Incorporating Interprofessional Education into Language Learning in a Japanese EFL Setting: A Case of Speech Activities. *Kawasaki Journal of Medical Welfare* 26-1, 49-61.
- 三田薫 (2022) 「英語初級学習者のパラグラフ・ライティング評価基準の確立を目指して」『実践女子大学短期大学部紀要』43, 65-83.
- Karen Louise Moller & Mette Lovshal (2020) Online peer feedback <https://tidsskrift.dk/lom/article/view/114504>
- 森下美和, 有賀三夏, 阪井和男, 富田英司, 原田崇也 (2020) 「多重知能理論アンケート調査にもとづく学生のふりかえり」日本認知科学会第37回大会要項 247-253.
- 大西好宣 (2019) 「グローバル時代における多重知能理論の再考：研究推進のための予備的考察と提言」千葉大学人文公共学研究論集 38, 277-291
- 奥羽充規 (2018) 「CLIL：多重知能理論と実践のための基礎知識」四天王寺大学紀要 第66号 105-117.
- Reinholz, D. L. (2018) Peer Feedback for Learning Mathematics. In *The American Mathematical Monthly* (Vol. 125, Issue 7, pp. 653-658). Informa UK Limited. <https://doi.org/10.1080/00029890.2018.1483684>
- Ruiling Lu & Linda Bol (2007) A Comparison of Anonymous Versus Identifiable e-Peer Review on College Student Writing Performance and the Extent of Critical Feedback In *Journal of Interactive Online Learning www.ncolr.org/jiol* Volume 6, Number 2, 100-115.
- 阪井和男 (2018) 「MI理論とその大学教育への応用—アクティブラーニング設計原理としてのMI理論の可能性—」『IEICE Fundamentals Review』Vol.11 No. 4, pp. 266-287., 電子情報通信学会
- 佐々木郁夫 (1993) 「日本人 EFL 中学生の英語学力と不安について」『関東甲信越英語教育学会研究紀要』第1号, 11-22.
- Shaheen, A., Azam, F., & Irshad, K. (2021) Anonymous Feedback: A Real-time Feedback to Capture Students' Engagement in Learning Process. In *Advances in Social Science, Education and Humanities Research*. Atlantis Press. <https://doi.org/10.2991/assehr.k.210930.011>

杉田由仁 (2011) 「ライティング評価における評定者の行動分析と評価基準の妥当性検証」『JACET-Kanto journal = JACET 関東支部学会誌』 8, 14-26.

恒安眞佐, 阿久津仁史, 鈴木政浩, “知能特性に応じた指導法が学習意欲に与える影響：大学生の英語学習に対する多重知能理論適応の可能性,” JACET 第 48 回全国大会要綱, pp. 275-276, 2009.

Appendix 知能特性を測る質問紙 (森下美和, 有賀三夏, 阪井和男, 富田英司, 原田崇也, 2020)

番号	質問内容	極めて そう思う	とても そう思う	まあ そう思う	あまり そう思 わない	ほとん どそう 思わな い	全く そう思 わない
1	物事を文章で書き表すのが得意な方だ	6	5	4	3	2	1
2	家で本や新聞をよく読む	6	5	4	3	2	1
3	話したり図を使ったりするより、メールや手紙などの文章を書いた方が自分の気持ちを伝えやすい	6	5	4	3	2	1
4	新しい言葉、諺、四字熟語などを覚えるのが好きだ	6	5	4	3	2	1
5	読書感想文や話を聞いて文章にまとめることが得意な方だ	6	5	4	3	2	1
6	計算が得意な方だ	6	5	4	3	2	1
7	不思議なことや疑問に思うことがあれば、それについて、もっとよく知りたい	6	5	4	3	2	1
8	初めて使う道具を直ぐに使いこなすことができる	6	5	4	3	2	1
9	説明書を見ながらプラモデルや家具、電化製品などを組み立てることが得意な方だ	6	5	4	3	2	1
10	色んな機械を分解してどのように動いているのかを知りたいと思う	6	5	4	3	2	1
11	身近な人の髪型や家具の位置の変化など外見的な少しの変化をいち早く見つけることができる	6	5	4	3	2	1
12	地図を見て目的地までの最も近い道順を見つけるのが得意な方だ	6	5	4	3	2	1
13	図やグラフや絵を描くと、考えていることをまとめやすい	6	5	4	3	2	1
14	綺麗な絵や写真を鑑賞するのが好きだ	6	5	4	3	2	1

15	机や椅子や家が上下左右からなど他の場所からどのように見えるのか思い浮かべることができる	6	5	4	3	2	1
16	平均台や竹馬など、バランスをとるスポーツが得意な方だ	6	5	4	3	2	1
17	じっとしているよりも、身体を動かす方が好きだ	6	5	4	3	2	1
18	夢中になれるスポーツがある	6	5	4	3	2	1
19	新しく始めたスポーツにも、直ぐに慣れることが出来る	6	5	4	3	2	1
20	自分は指先が器用な方だ	6	5	4	3	2	1
21	歌を歌ったり、楽器を弾いたりするのが得意な方だ	6	5	4	3	2	1
22	楽譜を読める	6	5	4	3	2	1
23	オーケストラなど同時に多くの楽器が鳴っている音楽を聴いてどのような楽器が使われているのか分かる	6	5	4	3	2	1
24	初めて聴く曲のメロディを直ぐに覚えられる	6	5	4	3	2	1
25	何度も繰り返し聴くお気に入りの曲がある	6	5	4	3	2	1
26	顔や態度を見て、その人の今の気分が分かる方だ	6	5	4	3	2	1
27	1対1で何かを考えたり、相談に乗ったりするのが得意な方だ	6	5	4	3	2	1
28	キャプテンや学級委員長などチームリーダーに向いている方だと思う	6	5	4	3	2	1
29	怒っているのか喜んでいるのか、など相手の気持ちに合わせた会話ができる	6	5	4	3	2	1
30	友達や家族を楽しませるのが得意な方だ	6	5	4	3	2	1
31	やると決めたことを一人でやり遂げることが出来る方だ	6	5	4	3	2	1
32	人の意見に左右されず、物事を自分の考えで決めることが出来る方だ	6	5	4	3	2	1
33	何か嫌なことがあっても、怒りや悲しみの感情を抑えることが出来る	6	5	4	3	2	1
34	自分で目標を立て、その通りに実行することが出来る	6	5	4	3	2	1
35	我慢しないといけない時は最後まで我慢できる	6	5	4	3	2	1
36	動物と一緒に遊んだり、世話をしたりするのが得意だ	6	5	4	3	2	1
37	動植物や昆虫や魚などの名前をたくさん知っている方だ	6	5	4	3	2	1
38	昆虫や石、植物など、自然界のものを集めるのが好きだ	6	5	4	3	2	1
39	家で動物や植物、昆虫などを自分が中心となって育てている (いた)	6	5	4	3	2	1

40	季節ごとに咲く花、食べられる食材、見える星や雲などをよく知っている方だ	6	5	4	3	2	1
----	-------------------------------------	---	---	---	---	---	---

## 日付を表す数詞に付される 定冠詞の有無について

土 屋 亮

### A Consideration of the Presence and Absence of the Definite Article before a Cardinal Number Denoting a Date

Ryo Tsuchiya

#### Abstract

While editing a textbook currently being written by several Spanish instructors at our university, the author of this article encountered the sentence *Mañana es 25 de agosto* (“Tomorrow is August 25th”), written by one of his Spanish-speaking colleagues. The author was greatly surprised by the absence of the definite article *el* before the cardinal number 25, since he had been firmly taught—almost three decades ago—that such date expressions obligatorily require the article. This observation raises the question of whether Spanish grammar has changed during the intervening years.

Although seemingly a minor issue, this phenomenon prompted the author to investigate how it is treated in a selection of reference grammars and textbooks, and to examine whether example sentences of the pattern [*Hoy / Mañana*] *es (el) Y de X* (“Today / Tomorrow is X Yth”) include the article *el* or omit it. Furthermore, data were collected from the Spanish academic corpora to identify naturally occurring instances of both variants.

The findings of this preliminary study indicate that both constructions—with and without the definite article—are attested in the data. Nevertheless, the *Real Academia Española* (Royal Spanish Academy)

regards the variant without the article as grammatically standard.

## 序.

本稿執筆時点において完成間近となっている、筆者と数名の同僚の手によるスペイン語教科書の原稿中で、スペイン語母語話者が書いた *Mañana es 25 de agosto* (明日は8月25日だ) という文を見つけた。何と云うことは<sup>1)</sup>ない文であるが、この文が、筆者がスペイン語の学習者として教わり、正しいと信じていた文法規則から外れていたために、やや驚いた。数詞25の前に男性単数定冠詞の *el* がいないからである。しかしながら、後述するが、これはスペイン王立アカデミー (以下RAE) も認める正しい文である。筆者は、*Mañana es el 25 de agosto* のように、定冠詞を入れた形を文法的に正しい文として教わった記憶があり、実際に筆者が学生の時分に使用した教科書にも、全てではないものの、そのように書いてあるのである。間もなく筆者がスペイン語を学び始めて30年になろうとしているが、この間に、文法が変わってしまったのであろうか。

本稿では、上記のような疑問を発端に、国内外の教科書や文法書において、この表現についての記述と例文を探し、それをRAEの提供するコーパスから得られたデータと照らし合わせることで、定冠詞の有無の揺れを確認することにしたい。なお、本稿で問題とするのは、*¿Qué fecha es hoy?* や *¿Qué día (del mes) es hoy?* という質問に対する [Hoy] es (el) Y de X (今日はX月Y日だ) という応答や、*Mañana es (el) Y de X* (明日はX月Y日だ) という発話であって、*¿A qué (cuánto/cuántos) estamos?* (今日は何月何日か?) に対して *Estamos a Y de X* (今日はX月Y日だ) と応答する例は考慮に入れない。*Estamos* から始まる後者の例では、Yは無冠詞とするのが原則であり、筆者もその点には異論がない。

## 1. RAE の見解

RAE は 215.6 万フォロワー<sup>2)</sup>を有するツイッター (現X) アカウントを運

用し、フォロワーからの文法上の質問に対して、RAE が出版する文法書の該当ページなどを引用しつつ、主に規範的な観点から返信をするというサービスを行なっている。筆者はまず、序で記した自らの疑問をRAEのアカウントに送り、その返信を待った。筆者が送った質問は、以下のとおりで、質問中には、Hoy es el 9 de agosto（今日は8月9日だ）という例を書いておいた。

Estimados especialistas @RAEinforma hace casi 30 años aprendí que al hablar de la fecha se pone el artículo definido al atributo del verbo ser como en "Hoy es el 9 de agosto", pero hoy en día hay un montón de ejemplos sin él. ¿Cuál es correcto? Sáquenme de esta #dudaRAE. Gracias.<sup>3)</sup>

それから2日と数時間後に、RAE から以下のような返信が得られた。なお、V.は「リンク先を見よ・参照せよ」の意味である。

#RAEconsultas En ese caso no se emplea el artículo definido o determinado: «Hoy es 9 de agosto». V. <https://rae.es/dpd/fecha>.

上記の引用のとおり、RAEの回答は「その場合、定冠詞は用いられない」というものであった。「参照せよ」と言われたリンク先のページは、RAE y ASALE (2005, 2025)における年月日、曜日の表現を説明している箇所ので、確かに、Hoy es 9 de agostoと同様の例文があるものの、それ以上の記述はなく、筆者は得心しかねている。

## 2. 文法書・参考書、教科書類における記述

では、次に、過去に国内外で出版された様々な著者の文法書や参考書、そして教科書類を繙き、関連箇所の記述を探すことにする。記述といっても、非常に些末なテーマであるがゆえに、何の説明もなく、ただ例文のみが記されている出版物も多いが、紙幅の限り拾っていくことにする。

## 2.1. 例文のみを収録している文献

まずは、我々が検討している定冠詞 *el* の有無についての説明はないものの、[Hoy] es (el) Y de X タイプの例文を載せている文献を、その例と共に列挙しよう。

以下のアユカ (1972) と中岡 (1981) は定冠詞 *el* を付けている一方で、飯野 (1996) と長谷川 (2012) は定冠詞 *el* を括弧に入れ、これが共起する場合しない場合のどちらもあり得ることを示している。いずれも、大学等で使用されることを想定して書かれた、スペイン語初学者向けの教科書である。

– ¿Qué fecha es hoy?

– Hoy es el 23 de Septiembre de 1964. (アユカ 1972: 188)

Hoy es el [día] ocho de agosto, de mil novecientos ochenta y uno.

(中岡 1981: 36)

¿Qué día es hoy? – Hoy es miércoles.

– Hoy es (el) cinco de septiembre. (飯野 1996: 20)

¿Qué día (del mes) es hoy? – Es (el) trece de enero.

(長谷川 2012: 29)

年代的に、中岡 (1983) と飯野 (1996) の間に出版されているのが、以下の Butt and Benjamin (1988) (以下、B&B と表記) である。彼らは以下の例において、定冠詞を括弧に入れているが、説明は特にない。

*Hoy es (el) 13 de diciembre* (B&B 1988: 314)

この著者らは継続的に版を改めることで知られているが、第2版のB&B (1994) において、この文は姿を消している。第3版のB&B (2000) 以降の版では、次の引用でわかるように、定冠詞を含めた例文を示しており、記述に変化がみられる。

*Hoy es el / estamos a 28 de marzo*

(B&B 2000: 442)

年代が前後するが、筆者が大学1年生のときに、著者の授業において用いた東谷(1994)では、以下の例のとおり、やはり定冠詞がある。

Hoy es el diez de agosto.

(東谷 1994: 236)

また、原(2000)には、次の例があるほか、以下の引用元の2ページ先には、『「年月日」を表現する公式』というものが挙げられており、いずれも定冠詞を含んでいる。

- ¿Qué día del mes es mañana? - Es el 22 (veintidós) de junio.

(原 2000: 82)

「年月日」を表現する公式

Es el (日) de (月) de (年).

(原 2000: 84)

再び、スペイン語初学者向けの教科書に戻ろう。福寫(2005, 2008, 2009, 2022)においては、同一の著者による文献内で、揺れや多少の変遷が見られる。福寫(2005)には、第12課冒頭の「会話」において、次のようなやり取りがある。なお、以下の引用中では、会話に登場する人物の名前は、頭文字だけを残し、省くことにする。

M: [...] ¿Y qué fecha es hoy?

D: Es el trece de octubre.

(福寫 2005: 50)

ここでは、Dのセリフのとおり、定冠詞 *el* が現れているが、2ページ先の文法のセクションでは、以下に示すとおり、*el* のない例文が収録されており、定冠詞の有無に関して一貫していない。

¿Qué fecha es hoy? - Hoy es veintiocho de octubre. (福寫 2005: 52)

これは、大変注目に値する事例である。では、同じ著者の他の著作を検討

しよう。福寫 (2008) には、第 9 課冒頭の「会話」に、次のようなやり取りがある。

M: [...] ¿Qué fecha es hoy?

A: El veinte de noviembre. (福寫 2008: 36)

ここでは、繫辞動詞 *ser* の直説法現在 3 人称単数形の *es* が省略されているものの、定冠詞の付いた数詞が用いられているのが確認できる。そして、やはり 2 ページ先の文法のセクションにおいては、次のように、

¿Qué fecha es hoy? – Hoy es el veintiocho de octubre.

(福寫 2008: 38)

定冠詞の付いている例が示されている。また、さらに次のページの練習問題のセクションにおいては、以下のように、付録の音声を聴いて日付を答える問題があり、日と月を入れる箇所は空欄になっているが、定冠詞が初めから書かれてある。

¿Qué fecha es hoy?

– Es el \_\_\_\_\_ de \_\_\_\_\_.

(福寫 2008: 39)

このように、福寫 (2008) においては、「今日は X 月 Y 日だ」の文に定冠詞 *el* を付けるということで、態度が一貫している。一方、この翌年に刊行された福寫 (2009) においては、この形式の表現は収録されず、定冠詞が共起しない *¿A cuántos estamos? – Estamos a cinco de julio.* (福寫 2009: 47) という表現のみが現れている。

次に、福寫 (2022) を確認する。これは、福寫 (2005) の改訂版であって、以下の引用に見られるように、会話における文例に変化は見られない。

M: [...] ¿Y qué fecha es hoy?

D: Es el trece de octubre. (福寫 2022: 50)

しかし、ここから2ページ先の文法のセクションにおける文例では、定冠詞 *el* が括弧の中に入れられ、どちらのパターンもあり得ることが示されており、初版と記述が異なっている。

¿Qué fecha es hoy? – Hoy es (el) veintiocho de octubre.  
(福寫 2022: 52)

最後に、初学者用の文法書である江藤 (2022) を確認しよう。以下に引用するページの説明はかなり充実したものであるが、定冠詞の有無についてはふれられていないので、このセクションにて引用する。なお、同書に含まれている英訳や日本語訳は省略する。

Hoy es 1 (uno) de octubre. Hoy es primero de octubre.  
[中略]  
– ¿Qué fecha es hoy?  
– Hoy es 23 de abril de 2002. (江藤 2022: 125)

江藤 (2022) の文例はいずれも定冠詞を含んでおらず、括弧に入れるような表記もない。この日付の表現においては、定冠詞は不要とする態度で一貫していると言える。

さて、我々が問題としている文を含んでいなかった福寫 (2009) を除く、上で確認した8点の教科書および文法書について、それらの定冠詞の取り扱いをここであらためて整理すると、以下のようになる。

- 【定冠詞あり】アユカ (1972)、中岡 (1981)、B&B (2000)、原 (2000)、福寫 (2008)
- 【定冠詞を括弧に入れる】B&B (1988)、飯野 (1996)、長谷川 (2012)、福寫 (2022)
- 【定冠詞あり・なしの混用】福寫 (2005)

## 2.2. 定冠詞の有無について説明を加えている文献

では次に、文法書や教科書等で日付の表現を提示している箇所において、定冠詞の有無について多少なりとも説明を加えているものを概観することにする。

まず、岡田 (1983) は、曜日と日付の表現を説明している箇所ので、以下のように述べている。我々が問題にしている文については、定冠詞 *el* を付した例を挙げつつも、「定冠詞も省略することがある」としている。以下、引用文中における我々が考察しているタイプの文には、☆を付けることにする。

C) 曜日には普通定冠詞が付くが、「今日は何曜日です」の時は無冠詞

El último día de la semana es el domingo. Hoy es lunes.

D) 日付は「el día + 数詞」で表し、数詞は「一日」だけ序数を使うか、または全部基数を使う。また、día は場合によっては省略することが多い。「今日は何日です」の時は、定冠詞も省略することがある。

El primero de marzo es mi cumpleaños.

☆ Hoy es *el* uno de abril.

El tres de mayo es el Día de la Constitución.

E) 曜日と日付がある時は、日本語とは順序が逆で、曜日が先で日付が後になり、日付の定冠詞は省略するのが普通。

Hoy es martes, tres de noviembre.

岡田 (1983: 123)

岡田 (1983) は例文に定冠詞付きのものを示しつつも、『「今日は何日です」の時は、定冠詞も省略されることがある』と述べている。一方で、定冠詞を付ける旨の説明を加えているのが、次に引用する、山田他 (1995) である。

日付では男性定冠詞をとる。(día が男性名詞であるため)

Hoy es el 15 de septiembre. 山田他 (1995: 224)

山田他 (1995) は、監修の山田喜郎を含む 9 人の著者の分担によって書かれた文法書であるが、この説明があるのは「第 13 章数量詞」で、執筆したのは先に引用した中岡 (1981) と同じ中岡省治である。そのためかどうか断言はできないが、中岡 (1981) と同様、定冠詞を伴う例文を提示している。

次に示す高橋 (1998) は、「冠詞を伴わない」とする説明を加えているが、提示している例には定冠詞が共起している。なお、引用中のイタリックの文字は原著によるものである。

年月日を表わすときは日 + de + 月 + de + 年の順。[中略] 通常は冠詞を伴わない。

¿Qué día es hoy? – Hoy es miércoles, 18 de agosto de 1994.

¿A cuántos *estamos* hoy? – Hoy *estamos* a 3 de mayo.

☆ ¿Qué fecha es hoy? – Hoy es *el primero* de mayo.

単なる日付でなければ ser の後でも定冠詞を伴う。

¿Cuándo es tu cumpleaños? – Mi cumpleaños es *el quince* de junio.

(高橋 1998: 269)

Hoy es miércoles, 18 de agosto de 1994 のように、曜日と日付が連続している場合や、Hoy estamos a 3 de mayo のように繫辞動詞 *estar* を用いる日付の表現に関しては、冠詞を伴わないということで筆者にも異論はないが、星印の文例には定冠詞 *el* が序数詞 *primero* の前に現れている。日付の表現では、「朔日」の場合のみ序数詞が使用される可能性があるが、我々が求めているのは基数詞を用いる例である。

最後に、スペイン語初學者向け教科書の Shiota (2021) を取り上げる。

Shiota は月の名前を紹介する項目において、日付の表現を提示し、例文に説明を加えている。説明は簡潔であるが、他の初学者向けの教科書に見られない詳細さを備えており、目を引く。

¿A qué estamos hoy? – Estamos a 10 de julio.

日付は冠詞は不要

=¿Qué fecha es hoy? – Es uno de enero. (=Es primero de enero.)

ラテンアメリカでは1日だけは primero が使われる

¿Cuándo es la fiesta? – Es el 3 de septiembre.

冠詞が必要

月名のはじめは小文字で書く	Es el 1 de enero.
今日の日付を言う場合は定冠詞は不要	Estamos a 13 de enero.
「今日」以外で特定の日付を言う場合は定冠詞が必要	Es el 5 de enero.

(Shiota 2021: 23)

引用中の表の部分は、原著では4つの説明が加えられているが、4つめは本稿に関連がないため省いている。Shiota は「日付は冠詞は不要」として *Estamos a 10 de julio* という例文を示し、下部の枠内でも「今日の日付を言う場合は定冠詞は不要」という説明と共に、*Estamos a 13 de enero* という例文を挙げている。この例文の双方が *estar* を用いているものであるが、この説明が *ser* を用いる文に当てはまるのかどうかは不明である。しかし、文例としては、¿Qué fecha es hoy? という質問に対し、*Es uno de enero* という応答を与えていることから、*ser* を用いる文においても定冠詞が不要であると Shiota が考えているように読み取れるが、表の中の *Es el uno de enero* という文の日付が、先行する例文と同日であるので、「(今日の日付は) 1月1日だ」という意味であるのか、「(それは) 1月1日だ」という意味であるのか、やや曖昧である。

では、本節で確認した文献の説明を整理すると、以下のようになる。

【定冠詞を付ける旨の説明あり】山田他（1995）

【定冠詞を付けない・省略される旨の説明あり】岡田（1983）、高橋（1998）、Shiota（2021）

### 2.3. 小括

本節では、スペイン語初学者向けの教科書や文法書における、日付を意味する文の定冠詞についての記述を確認した。我々が検討した文献の中では、岡田（1983）が古くから、定冠詞の省略可能性について、言及していた。その後、B&B（1988）が定冠詞を括弧に入れた例文を提示していたが、B&B（2000）以降はその括弧を外している。時が下るにつれて、定冠詞を括弧に入れ、省略できるものとしている文献が増加しているように思われるが、B&Bのような文献もあり、記述の内容には文献ごとに揺れが見られる。

### 3. 定冠詞を伴う文例の蒐集

1. で示したように、RAEは [Hoy] es (el) Y de X という文において定冠詞を用いないのを是としているが、前節で確認した諸文献での記述は揺れている。では、実際の運用実態はどうであろうか。RAEがそのホームページ上で提供するコーパスの一つである CORPES XXI（21世紀スペイン語コーパス）を用いて、実例を蒐集する。蒐集（検索）の方法は、以下のとおりである。

検索種別：Palabras ortográficas（正書法上の語句。入力語句をそのまま検索）

検索語句：hoy es el

地域・媒体・ジャンル等のフィルター：全てなし

検索の結果、970種のテキストに1058例の「hoy es el」がヒットしたが、我々の検討している語列に該当するのは、以下に挙げる6例にとどまった。

全てを引用する。

- (1) Pongamos que hoy es el día 1 después de que la crisis del coronavirus haya pasado.
- (2) Hoy es el día once del mes once.
- (3) Es que hoy es el 11-J.
- (4) Hoy es el sexto día del sexto mes del sexto año del milenio y, ...
- (5) Hoy es el 5 de julio.
- (6) Hoy es el día 354 de 2011; quedan 11 en el año.

なお、「明日は X 月 Y 日だ」を意味する «mañana es/será el» と「明後日は X 月 Y 日だ」を意味する «pasado mañana es/será el»、そして、「昨日は X 月 Y 日だった」を意味する «ayer fue el» を検索したところ、1 例もヒットがなかった。しかし、「一昨日は X 月 Y 日だった」を意味する «anteayer fue el» では、1 例のみが見つかった。下の (7) である。

- (7) Perdona el mitin; recuerda que anteayer fue el 1.º de Mayo.

上に挙げた例文のうち、(1) と (4)、そして (6) は「～日目」を意味しており、我々が検討しているものとは異なる。「今日は X 月 Y 日である」を意味している文は、(2)、(3)、(5) であるが、(2) においては男性名詞 *día* が基数詞の前にあり、この名詞の存在が定冠詞を要求している。したがって、これも本稿の目的には合致せず、「男性単数定冠詞 *el* + 基数詞」という語列になっている (2) と (5) のみが、我々の調査対象である。また、(7) に関しても「一昨日は 5 月 1 日だった」ということで、繫辞動詞 *ser* が点過去になっている文であるが、定冠詞に序数詞 1º が後続しており、我々の検討から外れる。

以上のように、我々が関心を抱いている条件を満たす例文は、CORPES XXI 内で、(2)、(5) のわずか 2 例であった。このコーパスは、40 万を超えるテキスト、4 億 4000 程度の語数という規模を有するが、そのコーパ

ス内で、2例である。この結果をふまえると、1. で示したRAEの見解のとおり、確かに定冠詞を用いる文例は圧倒的に少なく、それはRAEが示している規範によるのかもしれないが、今後、他のコーパスやインターネット上などでの蒐集も視野に入れる必要があろう。

#### 4. 日付と定冠詞 ― まとめにかえて

本稿では、[Hoy] es (el) Y de X (今日はX月Y日だ) という形式の文について調査をし、Yの前の定冠詞の有無について検討した。第3節で示したとおり、RAEの見解にもかかわらず、定冠詞を伴うものがわずかではあるものの、RAE自身が提供するコーパス内で得られるほか、国内外で出版されている各種文法書、教科書などでも、定冠詞のある例文が用いられていることが確認できた。そして、筆者は、この定冠詞の共起するパターンを「正しい」ものとして理解してきた。単なる8月25日は毎年やってくるので、複数性がある一方で、たとえば1977年8月25日は、今の暦の仕組みが変わらない限り、ただの1回きりの事象であり、もう二度とは巡ってこない日である。換言すれば、1977年8月25日 (25 de agosto de 1977) は唯一性を備える、定冠詞を伴うに相応しい表現であると言える。実のところ、本稿で検討した文例を載せていないために上では引用しなかったいくつかの文献<sup>5)</sup>において、日付と定冠詞の関係についてふれているものは少なくない。本稿は、最後にこれらを引用し、今後の考察の土台としたい。

Laca (1999) は以下の引用に見るように、日付および曜日の表現は常に定冠詞を伴うとしているものの、[Hoy] es (el) Y de X型の例は載せていない。なお、「今日は月曜日だ」は、Hoy es lunes となり、曜日を表す語が無冠詞となるため、この点に関する記述としても不十分である。

— Lleva siempre artículo la expresión numérica del día, que rechaza la preposición *en*. De idéntico modo son tratados los días de la se-

mana: *Llegaron {el diez/el lunes}*, *Lo necesito {para el diez/para el lunes}*, *Están aquí {desde el diez/desde el lunes}*, ...

(Laca 1999: 921)

また、B&B は 1994 年の第 2 版以降、*Articles* の章において、「曜日、月日と定冠詞」についてのセクションを設け、後続の版において細かな修正はあるものの、ほぼ同じ説明をしている。

The definite article appears with days of the week, but it does not appear when the day is the predicate of *ser* 'to be', or after *de* when it means 'from'. The article is also not used in dates:

*Llegan el martes*      They're arriving on Tuesday

[中略]

but

*Hoy es lunes*                      Today is Monday

*Trabajo de lunes a jueves*      I work from Monday to Thursday

*miércoles 23 de marzo de 1943*      Wednesday 23 March 1943

(B&B 1994: 40)

この引用部分では、*ser* の補語のことは語られているが、曜日の表現についてである。この統語環境における曜日の名は従来無冠詞である。一方で、日付においても冠詞は用いられない (The article is also not used in dates) とあるが、これは引用中の最後の例について説明したものであり、*ser* の補語となる場合のことではない。第 2 節で示したとおり、*ser* の補語となる場合の例文では、定冠詞を伴うものを使用しており、齟齬ではないかもしれないが、記述の穴があると言えるのである。

先にも述べたが、日付の表現と定冠詞は意味論上の親和性があるはずである。しかし、定冠詞は語彙的な観点から言えば情報を欠くため、定型の表現では使用されないこともある。日付以外の表現では、たとえば、序数

詞もその意味を考慮すると、「X番目の」というのは常にその他のいずれの順序でもないことから、定冠詞との親和性があるため、常に共起していてもよいはずである。それにもかかわらず、前置詞に導かれる語列においては、*en primer lugar* や *por primera vez*<sup>6)</sup> のように定冠詞が省かれる。本稿で扱った日付の表現における定冠詞についても、他の表現との関連や、通時的な観点からの分析が必要になるだろう。

#### 注

- 1) 実際にスペイン語母語話者の方が書いたものとは日付を変えてある。
- 2) 2025年10月13日時点。
- 3) 筆者のPC上で2025年8月9日の午後9時6分に送信した。なお、RAEに対し質問をする際には、ハッシュタグである #dudaRAE と、RAEのユーザーIDである @RAEinforma を書き入れなくてはならないことになっている。
- 4) 2025年8月12日の午前2時12分である。
- 5) 本文中でふれなかった文献については参考文献一覧を参照されたい。
- 6) フランス語 *pour la première fois* や英語 *for the first time* では定冠詞が使用されているという事実と比較することもできよう。

#### 参考文献

- Alonso, Martín (1968) *Gramática del español contemporáneo*, Ediciones Guadarrama, Madrid.
- アユカ、エンリケ・R (1972) 『スペイン語1年』第13版、上智大学、東京。
- Bolinger, Dwight L. et al. (eds.) *Modern Spanish, 3<sup>rd</sup> ed.*, Harcourt Brace College Publishers, Orlando.
- Butt, John and Carmen Benjamin (1988) *A New Reference Grammar of Modern Spanish*, Edward Arnold, London.
- Butt, John and Carmen Benjamin (1994) *A New Reference Grammar of Modern Spanish -2<sup>nd</sup> ed.*, Edward Arnold, London.
- Butt, John and Carmen Benjamin (2000) *A New Reference Grammar of Modern Spanish -3<sup>rd</sup> ed.*, McGraw-Hill, Chicago.
- Butt, John and Carmen Benjamin (2004) *A New Reference Grammar of Modern Spanish -4<sup>th</sup> ed.*, Hodder Education, London.
- Butt, John and Carmen Benjamin (2011) *A New Reference Grammar of Modern*

- Spanish -5<sup>th</sup> ed.*, Hodder Education, London.
- Butt, John, Carmen Benjamin and Antonia Moreira Rodríguez (2019) *A New Reference Grammar of Modern Spanish -6<sup>th</sup> ed.*, Routledge, New York.
- 出口厚実・長谷川信弥 (1997) 『アデランテー初級スペイン語文法―』 第三書房、東京。
- 江藤一郎 (2022) 『基本スペイン語文法―三訂版―』 弘学社、横浜 (初版は2003)。
- 福嶋教隆 (2005) 『生き活きスペイン語』 朝日出版社、東京。  
 —— (2008) 『動く! スペイン語』 朝日出版社、東京。  
 —— (2009) 『スペインの宝―スペインの言葉入門―』 同学社、東京。  
 —— (2022) 『生き活きスペイン語―改訂版―』 朝日出版社、東京。
- 原誠 (2000) 『スペイン語の第一歩』 三修社、東京。
- 長谷川信弥 (2012) 『大阪大学世界言語研究センター世界の言語シリーズ7 スペイン語』 大阪大学、大阪。
- 東谷頼人 (1994) 『はじめてのスペイン語』 講談社現代新書。
- 飯野昭夫 (1996) 『第2 語学のスペイン語』 第三書房、東京。
- 福嶋教隆／ファン・ロメロ・ディアス (2021) 『詳説スペイン語文法』 白水社、東京。
- Laca, Brenda (1999) “Capítulo 13: Presencia y ausencia del determinante”, en Ignacio Bosque y Violeta Demonte (dirs.) (1999) *Gramática descriptiva de la lengua española*, Espasa, Madrid, pp. 891-928.
- 宮城昇 (1953) 『基礎スペイン語文法』 白水社、東京。
- 中岡省治 (1981) 『スペイン文法の要点』 白水社、東京。
- 岡田辰雄 (1983) 『現代スペイン語講座』 芸林書房、東京。
- RAE y ASALE (2005) *Diccionario panhispánico de dudas*, 1<sup>a</sup> ed., Santillana, Madrid.  
 —— (2025) *Diccionario panhispánico de dudas*, 2<sup>a</sup> ed. (versión provisional), en línea.
- Shiota, Sayaka (2021) 『アクティブ・スペイン語』 朝日出版社、東京。
- 高橋覺二 (1998) 『スペイン語表現ハンドブック』 白水社、東京。
- 高橋正武 (1967) 『新スペイン広文典』 白水社、東京。
- 山田喜郎他 (1995) 『中級スペイン文法』 白水社、東京。
- 吉田秀太郎 (1984) 『基礎スペイン文法 (改訂版)』 白水社、東京。

執筆者紹介（執筆順）

杉 洵 忠 基 経済学部教授（アメリカ史）  
池 田 明 子 法学部准教授（英文学）  
馬 場 浩 平 経営学部講師（ドイツ文学）  
阿 久 津 仁 史 非常勤講師（英語教育）  
土 屋 亮 経済学部准教授（スペイン語学）

編集委員（五十音順 ○印委員長）

一 山 稔 之 経済学部教授  
小 池 求 経営学部准教授  
高 澤 美由紀 法学部教授  
東 浦 拓 郎 国際関係学部准教授  
ブルックス, ミキオ 国際関係学部准教授  
○松 本 賢 信 法学部教授

亜細亜大学学術文化紀要 第47号（2026）

ISSN 2436-9411（オンライン）

2026年3月15日 発行

編集者 亜細亜大学総合学術文化学会  
発行者 亜細亜大学総合学術文化学会  
製作者 株式会社 南窓社

発行所 〒180-8629 東京都武蔵野市境5丁目8番 ☎(0422) 54-3111 亜細亜大学

**Journal of the Society  
for  
General Academic and Cultural Research**

**No. 47 2026**

---

*CONTENTS*

- The Disenfranchisement of Black Voters in Mississippi:  
A Perspective from Color-Blind Racism ..... *Tadaki Sugibuchi* 1
- Shakespeare and Emotions: Pity and Empathy..... *Akiko Ikeda* 25
- Der Diskurs über den „Tenno“ im geschlossenen Heiligtum –  
Ein Vergleich zwischen Kaempfers *Geschichte und  
Beschreibung von Japan* (1777–1779) und Frazers  
*The Golden Bough* (1894) ..... *Kohei Baba* 45
- [Research Notes]
- Changes in writing ability through anonymous bulletin board  
use and the relationship with Multiple Intelligences..... *Hitoshi Akutsu* 61
- A Consideration of the Presence and Absence of the  
Definite Article before a Cardinal Number  
Denoting a Date ..... *Ryo Tsuchiya* 79
- 

The Society for General Academic and Cultural Research  
ASIA UNIVERSITY  
TOKYO, JAPAN